

新潟市美術館・新潟市新津美術館

研究紀要

Bulletin of

Niigata City Art Museum &
Niitsu Art Museum

松沢 寿重

創庫美術館 点 —— その由緒と事跡

..... p.3

第5号
(平成28年度)

No.5 (2016)

新潟市美術館・新潟市新津美術館研究紀要
第5号（平成28年度）

Bulletin of Niigata City Art Museum
&
Niitsu Art Museum
No.5 (2016)

目次

創庫美術館 点 —— その由緒と事跡

3

松沢 寿重

創庫美術館 点 ―その由緒と事跡

松沢 寿重

はじめに

創庫美術館 点は、新潟市中央区長潟（※新潟駅南口より市道弁天線沿いに約3km）の地に、食品会社の社屋兼倉庫として使われていた建物を改装し、現代美術を専門に扱う私設の美術館として1987年11月3日に開館。以降7年余にわたり、展覧会、美術出版、工芸教室、野外や街なかのアート・プロジェクトなど、美術に関する様々な活動を展開した。その間、津高和一、元永定正、伊藤公象、関根伸夫、戸谷成雄、榎倉康二など、日本の現代美術を代表する顔ぶれを続々と招いて個展を開催し、作品集を出版。また、新潟県内の若手作家たちが集い、互いに刺激し合う一拠点ともなった。敷地面積1,981.68㎡、延床面積1,492㎡の建物（二階建て）の内部に、広さ450㎡、天井高4.5mのメインギャラリーを擁する堂々の館構えであった〔図1〕。

この美術館は、新潟の企業家・清水義晴の「市民美学に貢献する」「アートが世界を変える力を持つ」という強い情熱と目的意識によって発起、実現されたものであったが、当時、新潟のような地方都市において、現代美術に特化した活動をこれほどの規模で、しかも継続的に行う施設はまだ珍しく、テレビや新聞、雑誌など各種メディアで繰り返し取り上げられ、地元はもとより全国に広くその存在感を示したのである。

バブル経済が崩壊した後の社会環境の変化や、土地建物が賃貸物件だった事情もあり、創庫美術館 点は1994年11月30日、惜しまれつつ活動の幕を閉じた。あれからすでに20年以上の月日が経つ。在りし日の美術館の様子を知る者は次第に減り、巷間で取り沙汰される記憶も霧の中へ遠ざかる景色のように薄らいでいく一方だ。しかし、同じ新潟市内における「水と土の芸術祭」〔註1〕や「うちのDEアート」〔註2〕、「オフィス・アート・ストリート」〔註3〕、或いはJR東日本新潟支社が運行する「GENBI SHINKANSEN（現美新幹線）」〔註4〕などのように、現代美術の有りようを市井一般の人々の日常と親密につながった形で目にする機会が多くなった昨今、改めて振り返ってみると、創庫美術館 点の先駆けとしての意義、次代へと投げ掛けた波紋は、新潟という地域内に限定しても、決して小さくなかったのではないか、と思う。

開館から間もない1988年1月に開催された「新潟現代美術“点”展」のパンフレット〔図2〕には、斎藤義重からの提供という写真を背景に、新年の慶賀もかけて「A HAPPY NEW ART」の文字が掲げられていた。飛行機の窓から遙か水平線の彼方の曙光を切り取ったかのような写真は、あたかもミニマルな抽象絵画の如くであり、また新潟の現代美術の新しい夜明けをも予感させる期待感に満ちている。そしてその中頁には、当時の高揚した気分を代弁するかのように、新潟市美術館の初代館長・林紀一郎の筆による次の一文が綴られていた。

現代美術は、新潟の美術風土には根づかないだろう、と半ば諦めていたのだが、最近ほんのちよっぴり希望が湧いてきた。昨夏の長岡での「新潟現代美術32人展」、そして昨秋、鳥屋野潟畔に創設された創庫美術館“点”が新春早々に企画・開催する「新潟現代美術“点”展」…。これらの意欲的な展覧活動がその理由である。

ところで、フランスの印象派はパリの写真屋の2階で始まった。アメリカの近代美術はニューヨークの兵器庫（アーモリー）で、また美術のポスト・モダン現象は工場や倉庫の屋根裏（ロフト）で始まった。この伝でいくと、新潟の現代美術は海苔屋の倉庫（ウェアハウス）で始まってもいいわけである。

いま、新潟在住と新潟出身の美術家の有志がこの“創庫”に集まり、相互に表現の火花を放ち、競い合う。喜ばしいことだ。美術に地方も中央もない。あるべきは自己革新の激しい意志と力である。表現の熱気である。惰眠をむさぼる現代美術の今日の状況をうち破る闘争の火花である。さすれば、倉庫（マガジン）は旧弊の美術を撃つ兵器庫となり、運動の拠点（ポワン・ダピュイ）となり、退嬰・保守の美術風土をくつがえす前衛のエネルギーの発火点となるだろう。

“点”展——どうか、現代美術不毛の新潟の砂漠にサボテンの花ならぬ“点”展の創造の花を開かせてほしい。期待切なるものがある。

「“点”展に寄せて―新潟の美術風土に「前衛」を点火せよ―」
新潟市美術館館長 林紀一郎



図1 創庫美術館 点 全景

註1 新潟市で2009年より3年置きに開催されている現代美術の芸術祭。越後平野の大地を育んだ「水と土」をテーマとする。2012年に第2回、2015年に第3回が開催された。

註2 新潟大学教育学部芸術環境講座がキャンパスに程近い内野の住民有志と協働で展開しているアート・プロジェクト。2001年より隔年で開催。

註3 新潟市中心街で開催される公募形式のアート・イベント。街路に面したオフィスのショーウィンドウを展示場所に使用。2010年より毎年開催。

註4 上越新幹線の新潟～越後湯沢間で2016年4月29日より運行を開始。新幹線E3系電車を改造した6両編成のジョイフルトレインで、「走る美術館」「世界最速芸術鑑賞」を謳う。土日休日を中心に1日3往復運転。



図2 新潟現代美術“点”展 パンフレット



図3 林紀一郎の自筆原稿（創庫美術館 点の旧蔵資料より）

創庫美術館 点は歴史上の存在である。それは如何にして生まれ、何をどのように行い、何を遺したのか。曖昧な「伝説」でも模糊とした「懐旧」でもない、語り継ぐための確かな「実像」の掘り起こしを、今、上の一文に込められていた思いとともに始めたい。

設立の母体と「作品主義」の源流

創庫美術館 点の経営は会社形態をとり、設立の母体となった企業の名を株式会社博進堂（本社所在地：新潟市東区木工新町）という。1921年に創業した学校卒業記念アルバムの制作を事業の支柱とする会社である。本稿の目的は一企業の沿革を述べることではないので、博進堂の歴史の詳細については別掲の資料に譲るが、後に美術館の設立へつながっていく大きな因子として、この企業が創業から体質的に内包していたと考えられる「作品主義」に触れておかななくてはならない。

コロタイプ (collo type) という版式の印刷がある。1869年にドイツのヨセフ・アルベルトによって開発実用化された最も古い写真製版印刷法で、日本では写真家の小川一真が、1889年に美術雑誌『國華』創刊号の挿画図版をこの版式で刷ったのが最初とされている(図4)。版種は水と油の反発を利用するリトグラフやオフセットと同じ平版に分類されるが、印刷の時には凹版のようにも作用する版質にその特徴がある。まず、ガラス板に感光剤(重クロム酸塩)を混ぜたゼラチンを塗布。これに写真ネガを密着露光させると、各部位の光の透過具合にあわせてゼラチン層の硬化の度合い、即ち水分によってゼラチン層の膨張する度合いが微妙に変化し、レチキレーションと呼ばれる微細な皺が発生する(図5)。これが印刷インキの乗る加減に作用し、最終的にシャドウ部からハイライト部までの豊かな階調再現に結果する、という原理だ。

もともとコロタイプは、初期の写真印画の保存性が脆弱だったために、それを補う手段として開発された技術であった。したがって写真図版のきめ細かな仕上がりは、他の版式の印刷に比べて抜群に優れている。だが一方で、この版式は刷版にゼラチン塗膜を使う必然で宿命的に耐刷性が低く、一つの版からは300～500部程度までしか刷ることが出来ない。小ロットの印刷には適しているが、部数の多い印刷には不向きなのである。長い間、学校アルバムの印刷で主流を占めてきた理由は、実にこのような特性に因った。現在のアルバム業界では、高速で大量部数を安定して刷れるオフセット印刷にすっかり座を明け渡しているが、博進堂においても1982年まではコロタイプ印刷機が稼働していたという。

ところで、写真評論家の金子隆一は、日本のコロタイプについて、「明治の末から大正時代をピークとして昭和まで続くピクトリアリズムを標榜した芸術写真を、まさに『オリジナル・プリント』と言っていいクオリティーを持って十二分に再現する印刷技術」であったとし、「今や日本の大正時代を中心とするコロタイプの印刷物は『オリジナル・プリント』として世界的にも認知」されている、と述べている(註5)。「オリジナル・プリント」の作品性が日本国内で認識されるようになったのは、各地の美術館で写真の収蔵が始まる1980年代以降のことであるが、金子の言うように「大正時代を中心とするコロタイプの印刷物」を広く評価するならば、それと符合する時期に博進堂が手掛けた学校アルバム、絵はがきや美術印刷の数々もまた、「オリジナル・プリント」つまりは「作品」の範疇に位置づけられるもの、と見做すことが美術史的にも可能となろう。

老舗の技や伝統が時の試練に耐えて引き継がれ、芸術性を帯びて昇華していく例は多い。博進堂の場合、創業以来のコロタイプ印刷の技術がそのまま伝承されたわけでは無かったが、長い年月の間に培われた社風、あるいは企業風土の素地に「作品主義」の精神が根強く存在したという話は、例えば高品位印刷「モノクロ495線」の取り組み(註6)などとともに、折々耳にしたことであった。おそらくそれに相違はない。そして、創庫美術館 点へと至る道筋の途上には、この「作品主義」を意識的に唱導し、さらに大きく進展させた「導き手」が存在したのである。

藤坂泰介がもたらしたもの(一冊の写真集から)

1980年代は、経済の好況を背景に日本の企業が挙ってコーポレート・アイデンティティを導入したCIブームの時代でもあった。CIとは、企業の理念や特性をシンボルマークや企業名ロゴの形で視覚化し、イメージを統一的に運用することで、企業活動のさらなる前進・発展



図4 『國華』創刊号の小川一真によるコロタイプ印刷図版、興福寺の《無著像》。この号には円山応挙筆《鶏図》、狩野正信筆《三笑図》の図版も同様に収められている。

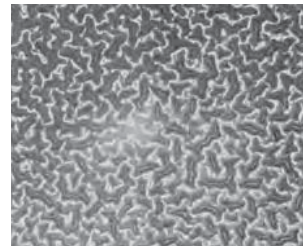


図5 コロタイプの版面拡大写真

註5 金子隆一「講演：コロタイプ150年の歩み」『玻璃彩 No.10』(2011年/コロタイプ技術の保存と印刷文化を考える会) pp.3-10

この講演において金子は、日本のコロタイプが、欧米では「オリジナル・プリント」と見做されるフォトグラビアに比して劣らないものであることを述べている。

註6 網点分解による写真製版は、通常は1インチ当たりのスクリーン線数175線を使用するが、博進堂では1988年にその3倍近い495線という高密度の網点分解で製版、印刷する技術を開発し、商品化していた。



図6 藤坂泰介 (1912-1987)

註7 清水義晴「変革は、弱いところ、小さいところ、遠いところから」(2003年/太郎次郎社) p.10

註8 『株式会社博進堂の歴史と創業理念』(1992年/博進堂) pp.28-29



図7 「100人の写真家による現代ぼおとれえと作品集」 pp.58-59 津高和一(左)と東郷青児(右)のポートレート

註9 藤坂泰介『企業ジャーナリズム メディアづくりの美学』(1982年/博進堂印刷センター・うちの企画室) p.165

註10 既刊の文献資料では、藤坂の二科展への出品歴は、「1954年の初入選以来連続6回入選」となっている。初出は1968年の藤坂の著書『あるぼお・れいあうと』(大阪コロタイプ印刷株式会社)巻末の著者略歴で、以後の記述は全てこれに倣う形で行われているが、二科会側の公式資料とは一致しない。

を目指そうとするものである。新潟県出身の亀倉雄策がNTTのCIを手掛けるなど、多くの優れたデザインが続々と生み出された。こうした時代気運の中で、博進堂もCIを導入するが、前述の「作品主義」を視覚化するべく起用したのが、津高和一、篠田桃紅、元永定正といった、現代美術の第一線で活躍する作家たちだったのである。これは、同時代を見渡しても類例を見出すことの難しい、CIの「離れ業」であったと言って差支えない。この「離れ業」を主導した人物が、藤坂泰介〔図6〕という編集デザイナーであった。

「この先生はすさまじい仕事の鬼でした。52日間、いっしょにカンヅメになって仕事をしたのですが、藤坂先生は1日3～4時間しか寝ないのです。先生は当時60歳くらい、私は25歳でしたが、私のほうが先に寝て、先生よりあとに起きるといふ始末でした。」〔註7〕これは、藤坂が1974年に企画室長として博進堂に迎えられた当時の様子を述べた、清水義晴の回想の一部である。「印刷の現場で、誰が見ても間違いようのない原稿こそ、完全原稿である」「博進堂で作る印刷物は、『製品』ではなく『作品』でなければならない」等々、今も社内でも語り継がれる「藤坂語録」からは、激動の昭和を生き抜いた職能人の、揺るぎない矜持が垣間見える。厳しい完璧主義を貫き、自らの姿勢を範として示しながら社員たちの意識を鍛え上げていった。また、発想の柔軟性、創造性の涵養のためには、ファインアートの持つ触発力を重視し、「いいデザイナーになりたかったら、デザインの勉強をするよりも、一流の芸術作品に触れるようにしなさい」が口癖であったという。

ここで、一冊の注目すべき写真集がある。1975年11月に北日本出版の名義で発行された『100人の写真家による現代ぼおとれえと作品集』という本だが、実質的には博進堂の制作で、藤坂が企画編集の指揮を執ったものである。まず目を見張るのは、序文に渡辺義雄、メンテナンスに重森弘淹、そして「100人」の中に、秋山庄太郎、大竹省二、篠山紀信、林忠彦、土門拳、田沼武能、細江英公、奈良原一高、深瀬昌久、荒木経惟、植田正治など、名だたる写真家たちが並んでいることだ。

「名もない地方の会社が有名な写真作家を相手に企画を打って、果たして相手にされるのか不安だった」〔註8〕とは会社が自ら振り返っている言葉だが、実物を見ると、確かに、地方の中小企業の為せる業とは俄には信じ難い、という強いインパクトを受ける。印刷と製本の機械さえ持っていれば何処でも誰でも容易く出来る、という代物ではない。おそらくは、「作品主義」の旗揚げを具体形として世に示すための、決意の行動だったのであろう。これより12年後に訪れる創庫美術館 点の起動までには、まだ幾つものステップがあるが、目に見える形で明確な指向性を持つ志が動き出したのは、時系列をたどれば実際にこの一冊からのことではなかったか、と思われる。

実はこの写真集の中でも特に注意の目を向けたいのは、全頁中ほどの、東郷青児と津高和一のポートレート写真を見開きの左右に配した部分である〔図7〕。何故かといえば、この二人の画家たちの間にある余白にこそ、藤坂泰介という人の意識の立ち位置と、その後の博進堂の「作品主義」との関係性が浮かんで見えてくるからだ。

“二科会のドン” 東郷青児の知遇

東郷青児は、藤坂が恩人として崇敬する人物である。藤坂は若い頃に二科展に出品していたことがあり、そこで東郷と出会い、大いに薫陶を受けたという。この二科展への出品というのは、商業美術部(現デザイン部)への出品のことで、「二科展に出品したパピエ・コレを評価していただいたのがご縁で、パリ遊学の機会を与えて頂いたり、個人的な仕事をバックアップして頂いた」と、藤坂は著書の中で述べている〔註9〕。

ちなみに、藤坂の出品歴については、国立文化財機構東京文化財研究所に保存されている二科展の出品目録を悉皆調査したところ、以下のとおりであった。

- ・1958年第43回二科展商業美術部1点入選
- ・1959年第44回二科展商業美術部1点準入選
- ・1960年第45回二科展商業美術部1点入選

「藤坂泰介」の名前で出品が確認できるのは以上の3回分であるが、1952年第37回展および1953年第38回展の商業美術部の1点入選に「藤坂瓢介」(広島市)という出品者の名前があり、二科展、商業美術部、広島市、藤坂姓という4項目の一致から、これは藤坂泰介と同一人物である可能性がきわめて高いと考えられる〔註10〕。また、商業美術部の創設は1951

年6月だが、これは前後する漫画部、写真部の創設とともに、戦後二科会の大衆化路線を強力に推し進めた東郷の発案によった。商業美術部が組織的に自立するまでは、東郷以下の絵画部会員が審査に当たったことが『二科70年史』〔註11〕にも記されていることから、藤坂が東郷から作品を評価され、直接声を掛けられるような機会は、1952年の第37回展の方が時期的にも可能性がより濃厚であったはずである。

東郷との出会いについては、次のようなエピソードも博進堂に伝わっている。「若い頃はベレー帽をかぶり、汚い格好をしておられたそうです。二科展に出品した折、東郷青児先生に認められ、入選されました。その時に、東郷先生にお金を与えられ、『藤坂君、画家である前に、まず健全な社会人であろうよ』と注意を促されたということです。藤坂先生は、ハッとして、すぐさまそのお金で服を買い、身だしなみを整えられたそうです。」〔註12〕大宅壮一の『昭和怪物伝』にも取り上げられ、“二科会のドン”と呼ばれた東郷青児。親分肌で面倒見の良いその人柄に、藤坂がすっかり敬服した様子がうかがえよう。

その後の、藤坂の二科ヨーロッパ美術視察団への参加、パリ遊学についても、東郷の格別な計らいであったようだ。1959年にフランスのサロン・ド・コンパレゾンとの交換展の契約が成立し、二科会の国際化が動き出す。これを機に会員・会友21名が渡欧したという記録が会史にあり〔註13〕、藤坂の渡欧との関連性が推量される。事情の詳細はともかくとして、当時は海外渡航にはまだ様々な制限があって、業務や視察、留学など特定の目的が無ければ認可されなかった時代だ。ヨーロッパの成熟した文明の所産を直接目にする体験は、「一流の芸術作品に触れる」重要性を藤坂に強く認識させたであろうことは想像に難くない。

商業美術を生業の場とした藤坂にとって、ファインアートの世界との太い接続は、一に東郷青児の知遇を得た事による。そして、その精神はやがて藤坂を通して博進堂へと伝播した。東郷は1978年にこの世を去るが、前章で触れたように、藤坂が博進堂の企画室長に着任した時、「作品主義」の伴走者として厚い信頼を寄せる画家、津高一がすでに控えていたのである。

津高一と自展展

津高一は1911年大阪生まれ、藤坂泰介は1912年広島生まれの同世代だが、二人の親交が、いつ、どのような形で始まったのかは定かでない。大阪芸術大学の津高の下で助手を務めていた吉田廣喜の談によれば、津高の妻、雪子夫人が広島出身という同郷の縁もある程度手伝って、次第に誼みを通ずるようになったのではないかと、ということである。加えて、この二人には文学的素養があり詩を書くという共通点もあった。要するに馬が合い、互いの精神的波長がシンクロする部分も大きかったのであろう。

博進堂の出版物に津高の名前と作品が最初に登場するのは、1975年4月発行の藤坂の著書『学校あるばむ編集ノオト』で、ページレイアウトの参考図版として津高の作品集が掲載されている〔図8〕。これは藤坂が携わった仕事を例示したもののだが、出典は『山村コレクションによる津高一 作品の流れ』(1971年4月発行)pp.14-15の見開き部分であった。山村コレクションは、山村硝子の社長を務めた兵庫県西宮市のコレクター山村徳太郎が私財を投じて築き上げた、戦後日本の前衛美術コレクションである〔註14〕。その収集は1954年に津高の作品の購入から始まるが、1971年、それまでの収集の成果を披露する機会として、24点の津高作品を並べた一日限りの展覧会が大阪で催された。作品集はその機会に合わせて発行されたもので、レイアウト、製版、印刷を大阪コロタイプ印刷(現ダイコロ)で行ったことが奥付に記されている。当時、藤坂は大阪コロタイプ印刷でアート・ディレクターを務めていた関係で、この作品集の仕事を担当したと考えられる。藤坂と津高との縁の始まりも、或いはこの一冊から、ということであったかもしれない。

藤坂が博進堂を指導した期間は、大きく二つの時期に分かれている。まずは1974年12月から翌年12月までの第1期、そして1980年頃から1987年1月に藤坂が亡くなるまでの第2期である。これは藤坂が、二代目社長の清水孝三の急逝に伴い一旦は博進堂を離れて疎遠となるが、社業を継いだ清水義晴の熱心な招請に応じ再び新潟を訪れるようになった、という経緯による。藤坂の指導を介した博進堂と津高との関わりも、第1期においては期間が短かったこともあって、まだ限定的な形〔図7、図8〕に留まったが、第2期では博進堂の企業イメージそのものと重なり合っていくかのように、津高一という画家の存在感が増していった。経過をたどりながら関連する項目を挙げていくと、以下のとおりである。

註11 瀧梯三「二科70年史 物語編」『二科70年史 戦後編(1946-1984)』(1985年/社団法人二科会) pp.32-33

註12 『藤坂泰介先生事蹟 新しい点をつくらう』(1993年/博進堂) p.23

註13 「二科七十年史 資料編 1946-1984」『二科70年史 戦後編(1946-1984)』(1985年/社団法人二科会) pp.67-68



図8 『学校あるばむ編集ノオト』(1975年/博進堂) p.99 (博進堂の出版物における津高一の初出)

註14 山村コレクションは、戦後日本の前衛美術を俯瞰する体系的、クオリティ、規模ともに全国屈指の内容で知られ、津高一、斎藤義重、吉原治良、元永定正など、68作家166点の作品が現在は兵庫県立美術館に収蔵されている。



図9 博進堂の社名書体とシンボルマーク
「個性を磨る」という言葉は藤坂の考案である。



図10 博進堂のペーパーバッグ

- ・1981年 博進堂CI導入、藤坂の主導で社名書体に篠田桃紅、シンボルマークに津高和一を起用〔図9〕
- ・同年 藤坂の企画編集で博進堂PR誌『こみゆにけえしょん』創刊、第3号より誌名を『企業じゃあなりすむ』と改め、津高による巻頭言（作品とエッセイ）の連載開始
- ・同年秋 藤坂が津高の「自庭展」に清水義晴を伴う（元永定正との出会い）
- ・1982年8月 藤坂の著書『企業ジャーナリズム メディアづくりの美学』刊行、表紙カバーの装画に津高の作品を使用
- ・1984年12月 研修所「点塾」開設（藤坂が基本設計、塾名書体に元永定正を起用）
- ・1985年 藤坂のデザインで津高の作品を使用した博進堂のペーパーバッグを作成〔図10〕
- ・1986年3月 藤坂の指導による「博進堂造形グループ作品展」を新潟市美術館の市民ギャラリーで開催
- ・1987年1月 藤坂泰介逝去
- ・同年4月 博進堂全社員のコラージュ作品展を新潟市美術館（企画展示室）で開催
- ・同年10月 『企業じゃあなりすむ』誌の連載から30篇を再編集し『余白／津高和一・作品とエッセイ』を刊行（巻末に津高から藤坂への謝辞）
- ・同じく『津高和一作品集 もうひとつのコスモス』刊行
- ・同年11月3日 創庫美術館 点が「津高和一展」を以て開館

こうして一通り見ていくと、藤坂の指導する博進堂の「作品主義」が、津高の力添えを受けながら徐々に推進力を増していき、遂には創庫美術館 点の創設にたどり着いた、という一連の流れが明快となろう。

ところで、2005年に新潟日報社から刊行された『新潟県美術名鑑』中の寄稿で、新潟市新津美術館（当時）の荒井直美は、1980年代日本のアートシーンで次第に頭を持ち上げてきた「オルタナティブ・スペース」のことに触れ、創庫美術館 点についてもその時流に乗った動きとして再評価を試みている〔註15〕。マクロ的には、産業構造や物流形態の変化に伴い、工場の撤退や空き倉庫の増加が顕著となっていた港湾周辺や臨海部の土地を再生させるウォーターフロント開発のブームがあり、倉庫の空間を転用したディスコやライブハウスなどが活況を呈していた時代状況とも連動する。倉庫転用の外形に着目すれば、創庫美術館 点も確かにそうした時代の流れに沿う一面を持っていた。だが、「オルタナティブ・スペース」という、当時は言葉も概念もまだ殆ど知られていなかったモノ〔註16〕を、ことさら意識的に目指す道理はなく、外形は飽くまでも行動の産物であって、「はじめに言葉ありき」ではない。起点としてより重要なのは、刺激的な出会いの場を目の当たりにして心に火が点いた32歳の青年企業家がいた、という端的な一事だ。津高和一が兵庫県西宮市の自宅の庭で毎年秋に催していた「対話のための作品展」、通称「自庭展」こそが、まさにその出会いの場であり、創庫美術館 点の直接の発想源なのである。

「そこで私は、津高先生をはじめ、元永定正先生や舞踏家の田中泯さんや詩人の大岡信さんにお会いしたのです。そこではお会いできませんでしたが、司馬遼太郎氏も出入りしておられたようでした。その『自庭展』の文化的な雰囲気と活気ある場が心に焼き付いて、新潟にもこんな場を創りたいと思って創ったのが『創庫美術館』です。」〔註17〕清水義晴がこのように述懐する出会いは、1981年の秋。彼を其所へ伴ったのは、言うまでもなく藤坂泰介であった。

津高の「自庭展」は、1962年から1986年までに通算22回、津高邸の約200坪という広い敷地内で催された展覧会である。会期は津高の誕生日（11月1日）と文化の日を挟む時期を恒例とし、邸内の広い芝生の庭を中心に、アトリエ、ギャラリー、廊下など、生活空間を開放し自作を展示するプライベート・イベントであった〔図11〕。その様子は、『僕の呪文と抽象絵画』（2005年／神戸新聞総合出版センター）〔註18〕や、『生誕百年 津高和一 架空通信展』図録（2011年／西宮市大谷記念美術館）〔註19〕に収められた津高の文章で詳しく述べられているが、そもそもの開催動機は、「既設の美術館、画廊だけが美術作品を発表する場所だという固定観念に対して自他ともへ反省を促すため」であったという。「対話のための作品展」という正式名称が示すとおり、目指されていたのは、見るものと見られるものとの、より洗いやざらいで素朴な交流の場であった。この考え方を現在の視点から「オルタナティブ」と評す

註15 荒井直美「美術館・博物館の動き 1990-2004」『新潟県美術名鑑』（2005年／新潟日報社）p.221

註16 小林進の編著によって関連する知見を最初にまとめた「オルタナティブ・スペース論 場の問題」（ダンスワーク舎）が上梓されたのは1989年4月であった。同書では、1983年創設の「佐賀町エキジビット・スペース」が日本国内における嚆矢として扱われている。

註17 清水義晴「博進堂の師 藤坂泰介先生」（2015／博進堂）p.36



図11 「自庭展」の様子

註18 同書 pp.91-129 「わが自庭展」

註19 同書 pp.49-55 「『架空通信』について」

るならば、初回を1962年まで遡る津高の「自庭展」は、思想の先覚性、実践の継続性において刮目に値しよう。津高自身の活動についていえば、1980年代に西宮市の夙川公園で全5回が開催された「架空通信テント美術館」展〔註20〕へと発展する土台となり、さらには新潟という遠隔の地にまで大きく影響を及ぼす可能性をも内在させていたのだった。

1987年11月3日、この「自庭展」をまるごと新潟へ誘致するかのような勢いを以て、創庫美術館 点は「津高和一展」の準備を整え、開館の日を迎えることとなる。

美術館の起動

創庫美術館 点の開設について、この場所（中央区長潟）で何故このような事が物理的に可能となったのか、土地建物の事情からも少し触れておきたい。既述のとおり、美術館本体の不動産は賃貸物件であったが、実はこれと背中合わせに隣接する土地は、以前から博進堂の所有地であった。同社は新潟市中心市街至近の中央区旭町が創業の地だが、1960年代後半、経営上の判断から市街地郊外への移転を検討するようになり、新たな社屋工場の建設用地として取得した660坪の土地が、この“隣接地”である。しかし、ちょうど同じ頃、東区津島屋に印刷工業団地が造成、分譲されたことから、結局1971年に津島屋への移転が実行され、長潟の地所は、手付かずのまましばらく据え置かれることとなった。状況が大きく変わったのは、この地に社員教育のための研修施設を建てる構想が持ち上がり、1984年12月、中小企業中堅社員実修所「点塾」〔図12〕として完成するに至ってからである。

現在もなお存続する「点塾」は、敷地いっぱいには繁る緑の林に囲まれた、山荘コテージ風の木造2階建ての施設で、屋内には吹き抜けの広い講義室に、最大42名〔註21〕の収容が可能な宿泊室、シャワー室、トイレ、屋外にはキャンプ場仕様の炊事場、ピクニック・テーブル、キャンプファイヤーの営火場などを備えていた。これらは全て、藤坂が自身のボーイスカウトやワンダーフォーゲルの経験を通して学んだ青少年指導の原理を、「行動する 考える 行動する」という基本主張に集約し、それを具現するための綱領や、教育方針の組み立てとともに、基本設計から采配を振ったものである。

塾名の「点」とは、藤坂によれば、「幾何学的な点ではなく、有機体の『根源となる点』（原点）、『基準となる点』（基点）の点をいい、現実的には、職域社会や組織集団を構成する成員個人」〔註22〕のことを言う。藤坂は、「作品主義」の抛って立つ基盤として「人間主義」を熱心に唱えていたが、「点」には、人間の個性を尊重する姿勢、ひとりひとりが自らの存在価値を自覚して成長していく事への願いが込められていた。この頃、藤坂の指導で博進堂の社員たちがコラージュ作品の制作に取り組み、新潟市美術館で展覧会を開催したことも、その信条に立脚した実践の一つだったといえよう。

「点になろう。きらめく点になろう。点をつくろう。新しい点をつくろう。」

これは、1986年11月発行の『点塾文庫 あんそろじい（朗読詞華集）』の最後尾に置かれた藤坂の言葉である。強い思い入れがあったと推量されるこの塾名書体に、藤坂は前衛画家・元永定正の筆を起用した。当時の元永は『芸術新潮』の表紙絵や幼児絵本での活躍でも広く知られていたが、藤坂は奔放で力強い個性の発露を元永の字に期待したのであろう。そして元永は、書の基本形から大胆にはみ出すユーモラスな創意を発揮して、見事にこれに添えてみせたのだった〔図13〕。

ところで、創庫美術館 点は、賃貸の倉庫転用部分のみで完結していたわけではなく、展覧会のレセプションや講演会、シンポジウム等、関連催事を塾舎で度々行うなど、相当程度、隣接する「点塾」と一体的な運用が為されていた。ついでに言えば、塾舎は宿泊機能も有していたから、アーティスト・イン・レジデンスも随意に実施可能であった〔註23〕。そうした諸々の実態を振り返ると、「点塾」の開設によって、美術館実現のポテンシャルは最早間近な水準にまで達していた、とみることが出来よう。あとは、何をきっかけとして起動のスイッチがオン側に入るかの問題であったが、それが1987年1月の藤坂の急逝だったことは、真に運命の無常としか言いようがない。突然の大きな喪失感に襲われた清水義晴は、これを機に同年3月限りで博進堂の社長職を弟に譲り、38歳にして相談役に退く。そして、津高邸で心に焼き付けた、あの「自庭展」のような場づくりに向けて、いよいよ本腰で動き出すのである。

また、この事態展開とまるで折角く示し合わせるかのように、「点塾」と背中合わせに隣接していた食品会社・新潟カネタの移転話も浮上する。地続きの土地建物を使用できる千載一

註20 津高の発案により1980年から85年にかけて開催されたアンデパンダン形式の展覧会。



図12 点塾の外観 図1の創庫美術館 点は、この施設の向こう側に背中合わせに隣接していた。

註21 後に収容人数は36名に改変。

註22 藤坂泰介「点塾文庫 指導者の条件（グループリーダー論）」（1986年／博進堂）p.59



図13 元永定正の筆による塾名書体 この揮毫原書は、2009年新潟市新津美術館の「元永定正+中辻悦子 絵本原画展」に参考出品された。

註23 2009年の水と土の芸術祭では、山口啓介、小原典子、高田洋一、逢坂卓郎ら出品作家たちの長期滞在にも利用された。

遇の機会が訪れ、ここに至って機は完全に熟したのだった。

開館と施設の概要

「新潟市内に現代美術館 倉庫改装、11月オープン」の見出しで、その第一報が公に報じられたのは、1987年7月31日付の日本経済新聞（新潟版）の紙上であった。初期段階の設立計画書では、施設名称は「作品広場 創庫 点」とされており、「倉庫」を転じて「創造の宝庫」、即ち「創庫」が、当初コンセプトネームとして、報道発表の前面に押し出されていた。これは、続く8月22日付の産経新聞（新潟版）、10月13日付の新潟日報（夕刊）の記事中の表記でも同様に確認できることから、「創庫美術館 点」の名称に落ち着いたのは、実は開館の間際近くであったという経緯が窺える〔註24〕。「一体何が出来上がるのか？」と問われた時、「創庫」という造語を示して、その都度「現代美術の展示を中心とした多目的施設」と補足の説明を続けるよりも、要するに「美術館」と答えた方が、結局、世間一般の理解も得やすかった、ということであろう。

新潟カネタの移転、社屋明け渡しは9月であったから、改装工事を含む現場の諸準備に当てられる期間は正味一ヶ月余という短さであった。計画策定から施工完了まで長く複雑なプロセスを要する公立美術館の施設改修に比べると、考えられないようなスピードである。が、とにかく、「倉庫」は瞬く間に「美術館」へと転身を遂げた。開館に合わせて作成された案内リーフレット〔図14〕に、施設の概要が記されているので、以下に全文を紹介する。



図14 創庫美術館 点の案内リーフレット
「点」の字は元永定正の揮毫による「点塾」からの一字が使われた。



図15 1階のメインギャラリー
写真は「津高和一展」の会場風景



図16 売店



図17 喫茶 枢（くるる）
応接や打ち合わせにも使われた喫茶室。長野いろは堂のおやきが名物メニュー。ランチサービスも行った。

創庫美術館・点は、倉庫を改装して生まれました。このネーミングには、「あるものがあるがままに」生かしていくというポリシーにそって既存の倉庫を生かし、創造の宝庫として創造の産物が集積される場所にしたいという願いが込められています。

「点」は根源となる点（原点）、基準となる点（基点）をいい、具体的には、ここに参加するひとりひとりを表します。

ここでは、発表の機会の少ない現代美術・工芸・写真を紹介するとともに、官立の美術館とは違った独自の視点と角度から美術展を企画してまいります。市民の憩いの広場、新潟新名所として皆様に愛されるもうひとつの空間を目指したいと考えています。

〈1 F案内〉

●ギャラリー・1階〔図15〕

倉庫を改装した450㎡のメインギャラリーです。天井も4.5mと高く、立体も含めて大きな作品を展示することが可能です。一面は、赤いレンガで仕切られ、作品を展示する白い壁面とのコントラストが気持ち良い美術空間です。

●売店（出版コーナー）〔図16〕

コレクション価値のあるポスター・画集・ポストカード等を販売します。ポスターはニューヨーク・パリから直輸入された最新作を含め、鑑賞性の高い作品ばかりです。その他、意欲的な作家の実験作品と小物グッズも販売します。

●喫茶 枢（くるる）〔図17〕

山奥の民家の古材をふんだんに使った談話コーナーです。古材の持ち味をそのままに活かした内装・家具がくつろぎのムードを演出します。新潟には珍しい古材を使ったカフェテラスも大きな魅力。飲物もこだわって集めた名品です。

●株式会社 点塾

野外生活をベースに、小集団で共同生活を営みながら、「自らの存在価値と集団における役割」を自覚する研修スペースが点塾です。スイスの山荘をモチーフとした塾舎と緑の広場（裏庭）が素敵です。事務所と研修所が直結しました。

〈2 F案内〉

●ギャラリー・2階〔図18〕

250㎡の第2ギャラリーを2階に設けました。ここでは、常設コーナーを設け、藤坂泰介先生（故人・グラフィックデザイナー・画家・詩人・教育者・作家）の多彩な活動の軌跡と遺品を展示します。デザイナー必見のコレクションです。

●工芸教室（陶芸・染色・ガラス工芸）〔図19〕

陶芸教室・ガラス工芸教室・染色教室の開催を4月に予定し、生徒を募集いたします。ここでは「創る喜び」を体験していただくとともに、作家の育成・交流を目的にします。従来のカルチャー教室とはひと味違う作品広場になります。

●売店（工芸品コーナー）

工芸教室に集う作家、工芸教室から育った作家の工芸作品を販売します。ここで販売する作品は、伝統工芸の枠にとどまらず現代感覚にマッチする意欲的・創造的な作品群です。贈物に、お部屋のアクセサリーにご利用ください。

●株式会社 点

創庫美術館・点の経営母体です。ギャラリーの運営・美術出版・美術品販売をメイン業務とし、博進堂グループ（企画・デザイン・製版・印刷・製本）と一体となって美術出版市場を開拓するとともに、美術市場をプロモートします。

入館料：一般 300円（200円）大・高・中生 100円 小学生以下無料
（ ）内は前売・団体 20名様以上の料金です。

開館時間：10時～18時

休館日：毎週月曜日

創庫美術館 点 〒950 新潟市長潟 3-7-10 TEL FAX ※番号省略

なお、以上の施設案内の欄外には、次の一行が挿入されている。

あんたの時間が 貴重だとおもったら およぎはじめたほうがよい さもなくば 石の
ようにしずんでしまう とにかく時代はかわりつつあるんだから

これは、ボブ・ディランの歌「The Times They Are a-Changin'（時代は変わる）」の邦訳歌詞からの抜粋だが、1960年代の音楽チャートを席卷したプロテストソングの代名詞のような歌を、敢えて掲げた意図は明らかであろう。創庫美術館 点こそが新しい時代の扉口を示そう、この場所からアートで世界を変えよう、という熱い意気込みが、このリーフレットには込められていたのだ。

ここに記載されている内容の他、むき出しの構造材や荷物の上げ下ろし用のベルトコンベア〔図20〕などが、まさに倉庫時代の名残をダイレクトに伝えていたし、美術館裏手の点塾側敷地内には新たに設けた10坪の窯場に陶芸用のガス窯を完備。また、代表の清水義晴は創庫美術館 点の「点主」を名乗り、彼の使用する個室は「点主閣」の異名をとって呼ばれたので、その遊び心がまたマスコミ取材の格好の材料となったりした〔図21〕。

「現代美術“創庫”いっぱい」「見て、つくり、展示もOK」「文化の新しい発信基地に」「独自の美術展開催と人材発掘の場」等々、報道各社は競うようにして、創庫美術館 点の開館のニュースを一斉に報じた。新潟のアートシーンにとっては、1979年に長岡現代美術館〔註25〕が閉館して以来、絶えて久しかった現代美術の拠点が再起動を果たす、という言外の意味もあったのである。

出版との連動（トータル・アート・プロモーション）

前章で触れた施設の主な諸元はさることながら、創庫美術館 点の力の源泉は、何と云って



図18 2階の第2ギャラリー



図19 工芸教室
ガラス教室用には、電気炉、サンドブラスター、研磨機、陶芸教室用には電動ろくろ、染色教室用には大型コンロや流し台の設備があった。



図20 倉庫時代からのベルトコンベア
美術館では時折、実用にも使われた。



図21 「点主閣」内部の様子
（新潟日報 1988年10月25日朝刊より転載）
畳敷きの小上がりもあり、冬場には炬燵を入れた。

註25 1964年、長岡市に開館した日本初の「現代美術」を館名に用いた美術館。新潟の企業家・駒形十吉と新潟出身の画廊主・山本孝の協働によって収集された作品群は、「大光コレクション」として名高い。



図22 「ART FACTORY」の愛称を持つ博進堂の本社・工場。1988年11月、新潟市東区木工新町に竣工。津高和一、元永定正、松宮喜代勝らの作品が飾られている



図23 「津高和一作品集 もうひとつのコスモス」古書市場では2万～6万円前後の値がついている。



図24 高見沢文雄展のレセプションで乾杯の音頭をとる谷新（写真中央）1988年7月10日、点塾にて。

註26 詳細は別掲の「創庫美術館 点 関連出版物」を参照。

も母体企業の博進堂が、印刷製本のための一貫した人材と設備（デザイン、製版、印刷、製本の各部門）を全て自前で保有していることであった〔図22〕。展覧会のような催事を行う場合、チラシ、ポスターなど広報印刷物や、図録、パンフレットなど関連冊子の作成が付き物だが、これらを外部発注する必要がない、という前提がもたらす力はかなり大きい。しかも、1980年代当時の印刷は、DTP技術が発達した現在とはだいぶ様子が違い、写植文字を手で台紙に切り貼りして版下を作成、製版カメラを使って線画化、写真は光学ドラムスキャナーで網点分解し、フィルム化して刷版に焼き付け、ようやく印刷機にかける、という具合に工程に多くの手間を要していた時代だ。特にカラー印刷の頁モノは現在よりも遙かに費用面でのハードルは高かったのである。

もちろん、用紙やインキなどの原材料費のほか、中間工程でかかる諸々のコストはタダではなく、自前ならば即ち刷り放題だった、というわけではない。だが、博進堂には、既に述べてきた「作品主義」の伝統によって、美術印刷を技術開発の機会として積極的に捉える体質があった。その中から生まれてきたのが、「カラー350線」「モノクロ495線」といった高品位印刷の独自技術であり、創庫美術館 点関連の印刷物は、そうした技術の「見せ場」ともなっていたのである。ちなみに、1987年10月に刊行された『余白／津高和一・作品とエッセイ』と『津高和一作品集 もうひとつのコスモス』〔図23〕の2冊は、奥付に「製版・印刷―博進堂アートカラープロジェクト」という表記があり、当時、特別扱いで取り組んだプレミアム品であった事が判る。掲載図版は、全てスクリーン線数350線という高精細の印刷で刷られ、肉眼では網点が見えないほど印刷のキメが細かい。仕様も函付き上製本の丹念な造本であるが、30年近くを経た現在でも、古書市場で殆ど値落ちしていないという事実に驚かされる。

このように、創庫美術館 点は、印刷製本の工程を支援システムとして持つ展示空間、というハード面の類稀な特性を活かし、個展の開催から作品集の出版まで、トータルでプロモートしながら現代美術の若手作家が育つ土壌づくり（トータル・アート・プロモーション）を目指した。当然ながら、プロモーションの質に影響するソフト面の充実も肝要であり、その観点で、外部プレーンの立場から企画に関わることとなったのが、美術評論家の谷新（※当時の氏名表記では「たにあらた」）である〔図24〕。谷は1982年、84年とヴェネツィア・ビエンナーレの日本館コミッショナーを務めた当時鋭い評論家で、津高和一の弟子筋の作家・松宮喜代勝と旧知の間柄だったことから、松宮の紹介を通じて縁の始まりとなった。清水義晴とは同世代で打ち解けた付き合いとなったことも、さらに関係が深まる導因だったようである。谷の関与は、1988年～89年間は事実上のゲスト・キュレーターに近く、松宮喜代勝、高見沢文雄、佐藤達、川島清、吉永裕、伊藤公象の作品集には、いずれも谷の原稿がメインテキストとして掲載されている〔註26〕。その後も、展覧会パンフレットへの寄稿など、美術館側からの随時の依頼に応じるという形で、信頼関係は長く続いた。

作品集は、東京の京橋にあったINAXブックギャラリーでも店頭販売され、銀座京橋界隈の画廊めぐりをする人々の間で一時は評判になっていたという。若手作家たちの間では、創庫美術館 点で展覧会を行い作品集を出版することが、憧れの的になっているという噂も、幾度か実際耳にした話であった。特に1989年は、創庫美術館 点が東京においても「攻め」の活動（※詳細は後述）を展開した時期であり、『朝日新聞ウィークリー AERA』や『流行通信 Homme』『日経トレンドィ』等の全国誌で紹介されるなど、上昇気運に沸く美術ブーム現象の一端を担う存在として、最も注目を浴びた頃であったかもしれない。

取り巻いていた状況

1980年代の新潟に大きな変化をもたらしたのは、上越新幹線の開業（82年）と、関越自動車道的全線開通（85年）であった事は論を俟たない。首都圏と直結する高速交通インフラの整備によって、すでに特定重要港湾と国際線も就航する空港を持つ新潟の拠点性はさらに飛躍的に向上し、商圈を評価した百貨店大手の伊勢丹が進出（84年）、発展性への期待は、「東京都新潟区」と綿名されるほどの投機熱も呼び起こした。また、仙台の政令市移行（89年）にも刺激された地元財界は「新潟100万都市構想検討報告書」をまとめ、現在の政令市新潟へとつながる長期ビジョンが、大きな声で語られるようになったのも、この時期からである。

大規模な再開発事業が市内の各所で槌音を立てていたが、特に街の様子が劇的に変わったのは、新潟駅の南口周辺地域であろう。新幹線の開業に伴い駅の南口が新たに設けられた事

によって、それまで「駅裏」と呼ばれ都市開発の遅れていた同地域は「駅南(えきなん)」へと、呼び名も街の人々の意識も大きくシフトチェンジする。その変化を象徴するかのよう、南口駅前広場には関根伸夫の環境美術作品《水の神殿》〔図25〕が設置された。博進堂も新幹線時代に反応し本社機能を駅南のオフィスビルに構える(84~88年)が、点塾(84年)、そして創庫美術館 点(87年)の立地も、南へと向かい始めた街の発展軸の軸線上に位置していたのである。

鳥屋野湯周辺の開発整備も、この街づくりの大きな趨勢に連動する形で進められていく。分けても1988年10月、江南区清五郎にオープンした天寿園については特筆しなければならぬ。現在は新潟市営の施設となっているが、もともとは、新潟県糸魚川市に本拠を置く谷村建設〔註27〕が築造、経営していた民営の施設であった。13,000㎡の庭園(中国庭園+日本庭園)に2,000㎡の建物、屋内施設には大広間や茶室、レストラン、ショップのほか、椅子の美術館、瞑想館などユニークな展示空間も備えていた。以前からの谷村建設との所縁もあり、天寿園の館長として着任したのは自由が丘画廊(東京)の実川暢宏で、現代美術を専門に扱う画廊主であったことから、創庫美術館 点とは良き近所付き合いの関係を結んだ。天寿園入り口のアプローチに、李禹煥の石と鉄板の大きな作品が置かれてあった往時の風景を、今も印象深く思い出す。

また、1989年12月16日には、この天寿園の大広間を使い、「地方における美術発展の可能性」と題するシンポジウム(パネリスト:本間正義、関根伸夫、林紀一郎、大嶋彰、等々力弘康/司会:実川暢宏)が開催された〔図26〕。これは、美術情報誌『ニイガタ美術通信インポート』の創刊イベントとして行われたもので、同誌の創刊は、美術を愛好する市民有志によって起ち上げられたものであった。

市民有志といえ、1985年12月に万代地区に開館した「新潟・市民映画館シネ・ウインド」〔図27〕の存在も、もちろん書き漏らすことは出来ないが、とにかく、1980年代の新潟の文化状況を振り返って言えることは、「官」よりも「民」の方に圧倒的な活力があった、ということに尽きる。動きの鈍い行政の姿勢を叱咤し、時に突き上げを食らわせるエネルギーレベルは今よりも格段に高かった。右肩上がりの経済成長を謳歌していた日本の社会全体に活力があったことも確かだが、さらに新潟の場合は、高速交通手段で首都圏とつながる事で、中央との差異性、文化の後進性を実感として意識する人々が急増した、それゆえに文化振興が切実に渴望された、という事も状況の背景には色濃くあったように思う。二言目には「市民が主役」を唱えながら、行政が文化催事を主導する構図の目立つ昨今とは明らかに様相が違い、わざわざ「市民が主役」など言わずもがな、というのが当時の「民」の勢いではなかったであろうか。創庫美術館 点も、間違いなくそのような活力の発信源の一つとして存在していたのだった。

アウトリーチの展開

「アウトリーチ」という言葉が美術館やホールなどの公共的文化施設で盛んに言われるようになったのは、1990年代に入ってからしばらくしてからの事であったと記憶する。政府統計によれば、全国の美術系博物館の1館あたりの入館者数は、平成以降の10年間で43%減少し、長期的な下降線は今もなお続いているが、「アウトリーチ」はその対応策として広まってきた側面も大きい。来館者が訪れるのをただ座して待つのではなく、館の外へ出かけて行ってより多くの人々に関心を抱いてもらうための様々な仕掛け作りを行う、言うなれば、「待ち」ではなく「攻め」の姿勢を指す言葉である。創庫美術館 点の時代には、まだ「アウトリーチ」という言い方で括られる事はなかったが、該当する様々な館外活動をすでに展開していた。開館フィーバーの波が引いていった後も、美術館の存在感をアピールし、ニーズを喚起するための「攻め」の企画を次々と起ち上げ、発信し続けたのである。以下、時系列順に主な活動を列記する。

◆ 24時間万代島フォーラム

1988年8月6日13:00から翌7日13:00まで、新潟市中央区万代島の倉庫「W」を会場として開催された新潟のまちづくりを考えるフォーラム。24時間、延べ700人が参加。主催団体の「万代島で万代島を考える会」は、創庫美術館 点・点主の清水義晴と市民映画館シネ・ウインド



図25 関根伸夫《水の神殿》1982年
新潟駅周辺整備に伴い、2009年に東区にある下山スポーツセンターの屋外広場に移設された。

註27 同社は、1983年に本拠地の糸魚川市に谷村美術館を建設したことも知られる。谷村美術館の建物は晩年の村野藤吾による設計で、天寿園の瞑想館は、もともと谷村美術館の設計案の一つであった。



図26 天寿園の大広間で開催されたシンポジウム



図27 新潟・市民映画館シネ・ウインド
1985年、古町・名画座ライブの閉館をうけて起ち上がった市民有志により開設された。有限会社新潟市民映画館が管理し、会員制の新潟・市民映画鑑賞会が運営する。



図28 「アンド・アルファ」臨時増刊号

代表の齋藤正行の二人を呼び掛け人として発足。このフォーラムは、前年から行政（運輸省、新潟県、新潟市）主導で実施された「新潟港ポータルネッサンス 21 調査」をきっかけに、万代島再開発についての市民の議論を確認する場となった。会場ステージに現代美術のオブジェが持ち込まれたという以外、純粋な意味でのアートイベントではなかったが、このフォーラムの中で提示された江東四地区連絡協議会の「万代島ウォーターフロント計画総合提言イメージ平面図」には、美術館の整備も盛り込まれており、15年後の県立万代島美術館の開設にも、少なからず影響を与えた可能性がある。このフォーラムの記録集として、タウン誌『アンド・アルファ』臨時増刊号〔図 28〕が9月30日付けで博進堂から発行された。

◆古町5プロジェクト〔図 29〕

1988年10月21日から23日まで（設営、撤収も含む3日間限定）、新潟市中央区古町通5番町で行ったアートプロジェクト。全長170mのショッピング・アーケード内を、杉板500本余りを使って、巨大な美術空間に変えようとした試み。アーティストは新潟県新井市（現妙高市）出身の磯部聡。作品名は《MOTION'88》。主催は古町通5番町商店街振興会、企画・協力として創庫美術館 点。企画の構想段階からNHKの密着取材が入り、プロジェクトが実現するまでの経過を収録。11月3日にNHK教育の番組ETV8「ゲージュツで街は甦るか？―新潟・新しい街づくりの試み―」で全国放映された。このプロジェクトの発想の下敷きには、清水義晴が前年にドイツを訪れた際に見た、ドクメンタ8やミュンスター彫刻プロジェクトのような、街全体が現代アートと一体化するイメージがあったという。単一の作品としては、創庫美術館 点が携わった中で最大規模の展示となった。



図 29 古町5プロジェクト

◆サバンク・テンポラリー・ミュージアム〔図 30〕

1989年3月10日から11月12日までの間、東京都杉並区永福町で、世田谷信用金庫の旧店舗を再利用した期間限定のアートスペース。博進堂の東京支社がこの建物に一時的に入居していた関係で貸し主の協力により実現。サバンク（SURBANK）はCI導入後の世田谷信用金庫の愛称である。金融機関の営業空間だった広い部屋を展示空間に転用、重厚なステンレス製扉のある金庫室もそのままの形で応用スペースとして使用された。展示会は、榎倉康二展（3月10日～5月31日）、松宮喜代勝展（8月30日～9月28日）、川島清展（10月6日～11月12日）の3本を開催。榎倉展と松宮展は、ハイネケンジャパンのアートサポートプログラム〔註 28〕に採択され、開催事業費の助成に加えて、オープニングパーティー用にハイネケンビールが提供された。なお、松宮展については、新宿（アクシスビル）、青山（ART SPACE）、銀座（ギャラリーIK）でも同時開催、都内では最も大きなプロモーション展開となった。



図 30 サバンク・テンポラリー・ミュージアム
写真は「榎倉康二展」の会場。右奥に金庫室が見える。

註 28 1988年～93年の間、ハイネケンジャパンが実施した現代美術の支援プログラム。展示会費用の一部を10万～50万円の間で協賛し、オープニング用にビール5～6ケースを提供した他、自社でも、「ハイネケンギャラリーバー CHAYAZAKA 1988」（恵比寿）や「ハイネケンビレッジ」（1989～90年／原宿）などのアートスペースを展開した。

◆有楽町阪急 佐藤達展

1989年7月21日から26日まで、東京都千代田区有楽町の有楽町センタービル（有楽町マリオン）内の阪急百貨店8Fコミュニティギャラリーにおいて、銀座のモリスギャラリーと共同主催した展示会。実質的には、創庫美術館 点で開催した展示会（6月4日～25日）の巡回展であったが、サバンク・テンポラリー・ミュージアムの展示替え期間（6月1日～8月29日）をタイミング的に補完する活動ともなった。特設の物販ブースには、ルリユール（手作りの工芸製本）による特装本の作品集も展示公開された。

◆「朱鷺色の浜」プロジェクト〔図 31〕

1989年夏、新潟市西区青山海岸（通称：小針浜）の波打ち際で行われたプロジェクト。海岸から採取してきた砂を創庫美術館 点の陶芸窯で何回にも分けて焼成、ピンク色に焼き上がった1t以上の量の砂を現地に運び撒いて砂浜を覆った。砂を焼くとピンク色になる、というのはアーティストの伊藤公象から出た雑談ついでの話であったが、清水義晴が敏感に反応し、プロジェクト化の運びとなった。「重労働の割に、撒いたアトから波に洗われ、風に飛ばされるといふ、はかない展示会」しかし「遊びという点からみれば、これ以上贅沢な遊びはない」と清水は記している〔註 29〕。伊藤公象の作品としては《雰困気・化粧》と題され、9月発行の作品集に、カラー図版が谷新の評論とともに掲載された。



図 31 「朱鷺色の浜」プロジェクト

註 29 清水義晴「理念空間の創造 創庫美術館・アートプロジェクト 1988-1990」（1991年／博進堂）pp.70-72

◆新潟縦貫・関根伸夫展〔図32〕

1990年3月4日から4月15日にかけて、創庫美術館 点、天寿園（瞑想館）、アトリエ我廊での関根伸夫展を中心に、新潟駅南口広場の彫刻《水の神殿》、ホテル新潟1Fレストラン《○△□のインスタレーション（※現存しない）》という既設の関根作品もつないで、新潟を南北に貫く連携軸を形成したプロジェクト。主催者名を「新潟オイコット推進協議会」とした。「オイコット」とは、「TOKYO」のアルファベットを逆に並べた「OYKOT」のカタカナ読みで、博報堂生活総合研究所が発表した「非東京」を意味する造語。3月17日には、「環境美術」をキーワードに、まちづくりについて語るシンポジウム「都市復興の構図—環境美術の可能性—」がホテル新潟で開催された。



図32 関根伸夫展のオープニング（天寿園にて）
左から林芳史、関根伸夫、清水義晴、藤由暁男、美川暢宏

チャレンジの終幕

本稿の起稿に先立ち、「創庫美術館 点の挑戦」と題する美術講座を新潟市美術館の講堂にて開催した（2016年3月19日）。当日の受講者アンケートに、「挑戦というが、一体何と戦っていたのか？」という感想が寄せられたが、創庫美術館 点の「挑戦」とは、打ち倒すべき存在が何処かにあって、それに対し戦いを挑んでいた、という性質のものでは勿論なかった。「困難な事や未経験のことに取り組む」という意味での「挑戦」であって、「チャレンジ」と片仮名で表記した方が、語感としてむしろ近いかもしれない。開館当時、清水義晴が繰り返し言葉にしていたのは、「日本の文化行政の貧困」や「企業の文化活動に対する支援が、欧米に比べ立ち遅れている」という、我が国における文化振興の後進性であって、だからこそ彼は、現代美術の作家が育つ環境の整備に先鞭をつけ、そこに新たな商機を開拓して行く、という夢を思い描いたのだ。

それでは、創庫美術館 点の活動は、企業による芸術文化の支援活動だったのか？と問えば、答えは単純ではない。「美術館」というと、公立私立の別に関わらず、一般に公益性の高い存在として受け止められるが、創庫美術館 点の場合は、表向きは「美術館」を名乗りつつも中身は、美術商、出版社、印刷会社、創作工房などの顔が未分化のまま同居する、私企業運営の施設であったために、公益と私益の線引きが明確ではなかった。私企業である以上は、公益財団法人やNPO法人のような非営利目的の団体と同じ、というわけにはいかない。資本主義の原則下では、企業の目的はあくまで「利潤の追求」であるから、現代美術の作家が育つ環境の整備…という志を掲げた起業であっても、投資過多では存立そのものが危うい。その加減が難しかったのである。

理想をいえば、観覧料収入で施設の光熱水費や維持管理費をカバーし、作品販売や出版、印刷、工房の事業収益で人件費を賄い、純利益が出た場合はさらに公益目的に拠出する、という循環が可能であったかもしれない。だが、現実の経営は苦戦を余儀なくされ、前章で述べた「アウトリーチ」も果敢に試みたが、形勢の挽回には至らず、母体企業の博達堂から支援を受け続けるという構図からは、遂に抜け出すことが出来なかった。

1990年4月以降、清水義晴は、以前から関心度の比重の高かったまちづくりや人材育成の分野へと活動の軸足を移し、美術館の事業からは次第に遠ざかっていく。世の中では、空前の好景気を背景に、大手企業を中心に芸術文化を積極的に支援する動きが広まり、90年2月、社団法人企業メセナ協議会が発足。同年3月、国立劇場法の一部改正法施行に伴い芸術文化振興基金が設置され、91年7月には新潟市芸術文化振興財団も設立された。大企業の連合や行政の大きな力によって、芸術文化を支える仕組みづくりが進み、こと文化振興に限っても、時代は確実に変わりつつあった。創庫美術館 点は、初期のような「攻め」の姿勢はかなりトーンダウンしたものの、新潟出身や在住の現代美術作家たちの紹介を重点化し、特に20～30歳代の若い作家の掘り起こし〔図33〕も行うなど、地道な活動に力を注いでいたが、土地建物の返還を求める貸し主の意向を受けて、94年11月30日で閉館。7年余に亘ったチャレンジに幕を下ろすこととなる。

折しも、新潟市では1995年度から2005年度までの11年間を計画期間とする「新潟市文化振興ビジョン」〔註30〕の策定作業が進められ、95年3月に『文化のかおるまちづくり 新潟市文化振興ビジョン』（発行：新潟市総務局国際文化部文化振興課）が完成する。新潟市の文化振興が、明文化された施策に基づいていよいよ本格的に動き出すが、この冊子の「企業の文化支援活動の現状」にも、「文化施設の現状」にも、「現状」から既に退場していた創庫



図33 20～30歳代の若手作家に焦点を当てた「レア・アート・エクスプレス」、中は点塾でのシンポジウム、下は喫茶室でのオープニングパーティー（1990年11月3日）。同展は93年まで4回開催された。

註30 新潟市文化振興ビジョン懇話会には、清水義晴も委員の一人として参加していた。

美術館 点の名は、どこにも記されていない。その一事は恰も、文化振興の役者の交代劇を象徴するかのようでもあった。

創庫美術館 点の遺産

創庫美術館 点がどのような美術館だったのか、記憶や痕跡を伝えるものはあまりにも少ない。現代美術という嗜好の幅が限られた分野を専らとした事もその一因だが、例えば、新潟日報社から1987年に『新潟県美術名鑑』が刊行された時には、まだ開館しておらず、また1995年版の刊行時には、既に閉館していたため、県内の美術情報が満載されているこの2冊には、残念ながら、現役の美術館として掲載される機会を完全に逸していた。2005年版の名鑑では、辛うじて触れられている事は先に述べたが、内容にまで踏み込んだ紙幅の量ではない。このような次第だから、文献に当たって調べたいと思ったとしても、ほとんど手がかりは無いに等しい状態、というのが実状であったろう。

創庫美術館 点の遺産について、まず、第一に挙げたいのは、関連する出版物である。作品集など、博進堂の在庫や古書市場から入手できる場合もあるが、中には公共の図書館等で閲覧可能となっているものもあるので、書籍24冊の詳細データを別掲(pp.24-29)にて一覧に整理した。また、美術館の活動の詳細については、時系列順の催事(pp.30-31)と新聞・雑誌等、逐次刊行物の掲載情報(pp.32-35)を出来る限りまとめた。これらについても同様に参照されたい。

創庫美術館 点を直接知る人、そこから何かを得た経験のある人は、程度に差はあれ、各々が有形無形の遺産を受け継いでいるに違いない。それらが、現在のアートシーンにどれほどの影響を、精神的、物理的に及ぼしているのか、全容は知る由もないが、最後に一つの提案も兼ねて、新潟市内の公共の空間にある「遺産たち」を紹介しておきたい。



図34 星野健司《不可思議の森》西大畑公園



図35 青木弘樹《STONE HORN》
新潟市立旧二葉中学校



図36 霜島健二《自然と人》新潟市立月潟中学校

創庫美術館 点が恒久設置の野外作品を手掛けたのは、1989年3月、中央区西大畑公園にある、星野健司の作品《不可思議の森》〔図34〕が最初であった。星野は1988年と89年の「新潟現代美術点展」に出品し、94年には個展も開催した、新潟市出身、在住の彫刻家である。作品は新潟市美術館に隣接する公園に設置されているため、まるで美術館から脱け出してきた、ここに居場所を見つけて佇んでいるかのようにも見える。公園の木々や訪れる家族連れの雰囲気ともよく親和する、ヒューマンスティックな抽象造形の群れがこの作品の魅力であろう。

また、新潟市美術館からほど近い旧二葉中学校の入り口には、89年4月、中学校の創立40周年を記念して設置された青木弘樹の作品《STONE HORN》〔図35〕がある。青木も新潟市出身、在住の作家である。創庫美術館 点では、1988年と90年に個展を開催し、若手作家のグループ展「レア・アート・エクスプレス」の常連でもあった。これは18tの安田の自然石を使った高さ5mの作品で、天を指して地面から突き出した巨大な指のような存在感と迫力がある。二葉中学校は2014年、学校の統廃合により閉校となったが、この旧校舎は、2018年に国際青少年センターおよび芸術創造ファクトリー（いずれも仮称）として生まれ変わるための整備計画が、現在進行中だ。

信濃川を少し遡った南区の月潟中学校には、食堂棟の外壁に霜島健二のレリーフ作品《自然と人》〔図36〕がある。これは1993年に新校舎の完成に合わせて設置されたもので、建物の設計段階から構想された作品である。西蒲原の田園風景をモチーフに制作されたものだが、ステンレススチールや真鍮、コンクリート、花崗岩で作られた幾何学的な造形物が、重力から解放されたかのような浮遊感を与えられ、軽やかな構成のハーモニーを奏でている。霜島は南魚沼市出身、燕市在住の彫刻家で、創庫美術館 点では「新潟現代美術点展」の常連であり、1991年には個展も開催した。創庫ゆかりの地元作家たちの中でも最も活動的な一人に挙げられる。

以上の3つの野外作品は、創庫美術館 点が事業名を「感境創造プロジェクト」と名付けて設置に携わったもののうち、新潟市の公共管理の下で現存する「遺産たち」である。これらが健在である限り、創庫美術館 点の展覧会は今なお続いている、と解釈することも可能と思うが、いかがであろうか。

おわりに

今も心に印象深く残っている光景がある。1988年11月のこと。博進堂の社屋工場が、津島屋から現在地の木工新町へ移転した後、抜け殻のように静まりかえった旧社屋内で、ガラス窓にペイントで書かれていた次の言葉に、ふと目が止まった〔図37〕。

夢はまことに頼りないものであるが、それをもっているのともっていないのとは、人生はまるで違ったものになる。(バートランド・ラッセル)

これは、藤坂泰介、それとも清水義晴の好きだった言葉だろうか。思えば、「作品主義」の松明を赤々と焚いて進んだ道程は、かつて此の場所で火が灯され、歩みが始まった。

創庫美術館 点も、まことに頼りないひとときの夢のような存在であったかもしれない。だが、そのひとときの夢が、後の時間軸に作用したものは、決して小さくなかったのではないかと改めて思う。人材に関していえば、創庫美術館 点の開館スタッフで、「水と土の芸術祭2012」のプロデューサー、同じく「2015」の総合ディレクターを務めた文化現場の小川弘幸氏は、その筆頭に挙げられよう。不肖ながら、新潟市美術館ではすっかり昔語りの多くなった私自身も、実は創庫美術館 点の末席を汚していた一人である。

本稿は、2013年「GUN—新潟に前衛があった頃」展を終えた新潟県立近代美術館学芸課長の藤田裕彦氏から、「次はぜひ創庫美術館を…」と促された事に直接契機を端を発している。起稿に際しては、津高和一に関する調査で、甲南女子大学教授の河崎晃一氏にお世話になり、その紹介で吉田廣喜氏から貴重な資料や情報をご提供いただいた。また、宇都宮美術館館長の谷新氏からは、創庫美術館 点の活動が最も盛んだった頃の思い出をお聞かせいただいた。博進堂の田沢孝氏、社長の清水伸氏には、昔馴染みのご縁に甘えて、起稿のベースに関わる準備、調査を全面的にご支援いただき、同社OBの渡部泰栄氏からも社歴に関するご教示をいただいた。そして、清水義晴氏からは本稿への取り組みをご快諾いただき、温かく見守っていただいた。本稿の成立に関わる全てのご厚誼に対し、心から深く感謝を申し上げたい。

(新潟市美術館主幹／学芸員)



図37 博進堂の津島屋旧社屋にて1988年11月

資料：博進堂のシンボルマークと社名書体について

「当時はCIなどという言葉も知らない時代でしたが、私は会社のロゴ、それも世界に通用するロゴをつくろうと思いつき、あるとき藤坂先生に相談しました。先生は「おお、すぐやろう」と賛成してくれました。そして「マークは津高一に、文字は篠田桃紅に頼もう」と決めてしまったのです。どちらも世界的な作家です。そして自分で会いにいって、仕事を依頼してきたのです。」

清水義晴『変革は、弱いところ、小さいところ、遠いところから』p.209より

象
徴



個性を刷る

博進堂の先覚的な歴史を想い
 種り多い未来への祈りが
 私の墨に匂うことを希い
 三つの文字を書いた 篠田桃紅

ロゴタイプ

パーソナル・コミュニケーションの時代を発想・演出・表現する情報企業としての機構を確立して、一般市場へ進出する体制を整えたさいに、その企業イメージを明快に表現する新しい記号として、社名書体も、類型がないこと、グラフィック・デザイナーの幾何学的なレタリングではなく前衛書家のダイナミックな毛筆文字であること、を表現条件として、新鮮な個性を発散する書体を期待して、書道界に墨象という独自の世界を創造された篠田桃紅先生にお願いして制作して頂きました。この作品は先生の博進堂への愛情が文字の姿をかりて表現された墨象であって、単なる記号ではないことを有難く思っています。

トレードマーク

現代のトレードマークは、その99%が幾何学的なデザインですが、当社は篠田桃紅先生に社名書体を創って頂いたとき、その墨象に調和するトレードマークの条件として、フリーハンドによる表現を考え、抽象世界の貴重な洋画家・津高一先生にお願いして創って頂きました。このトレードマークは、印刷企業のイメージを、印刷インキの三原色（イエロー・マゼンタ・シアン）と、平筆のタッチで表現して頂いたユニークな作品です。社名書体およびスローガンとの合唱による視覚的效果を演出しています。

スローガン

博進堂は、大正10年創業という古い伝統・信用を持った印刷企業と、情報化社会から発射される印刷メディアを市場とするニュータイプの情報企業という二分野の市場を展開していますが、そのアピールポイントの一要素として制定したスローガンが「個性を刷る」です。このスローガンは、「刷る」という言葉で企業の体質を表現し、すべての情報メディアに独自の造形と機能を創造する制作精神を「個性」という言葉で表現しています。

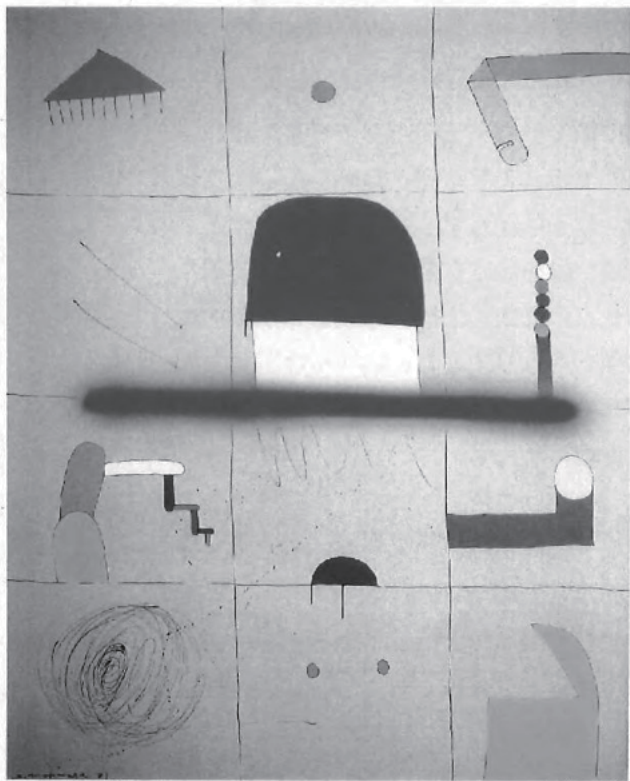
※ 1985年の会社案内「まいぼおとれえと」より転載

FLOOR PLAN

創庫美術館 点+点塾



1988年8月7日の「創庫美術館 点」へ、タイム・スリップ!



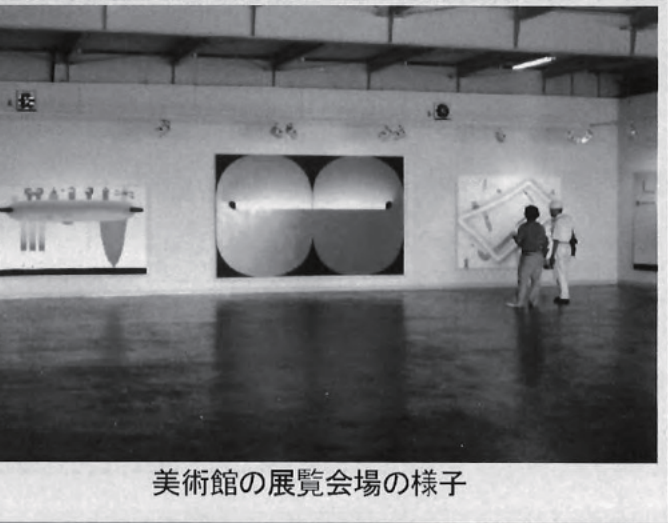
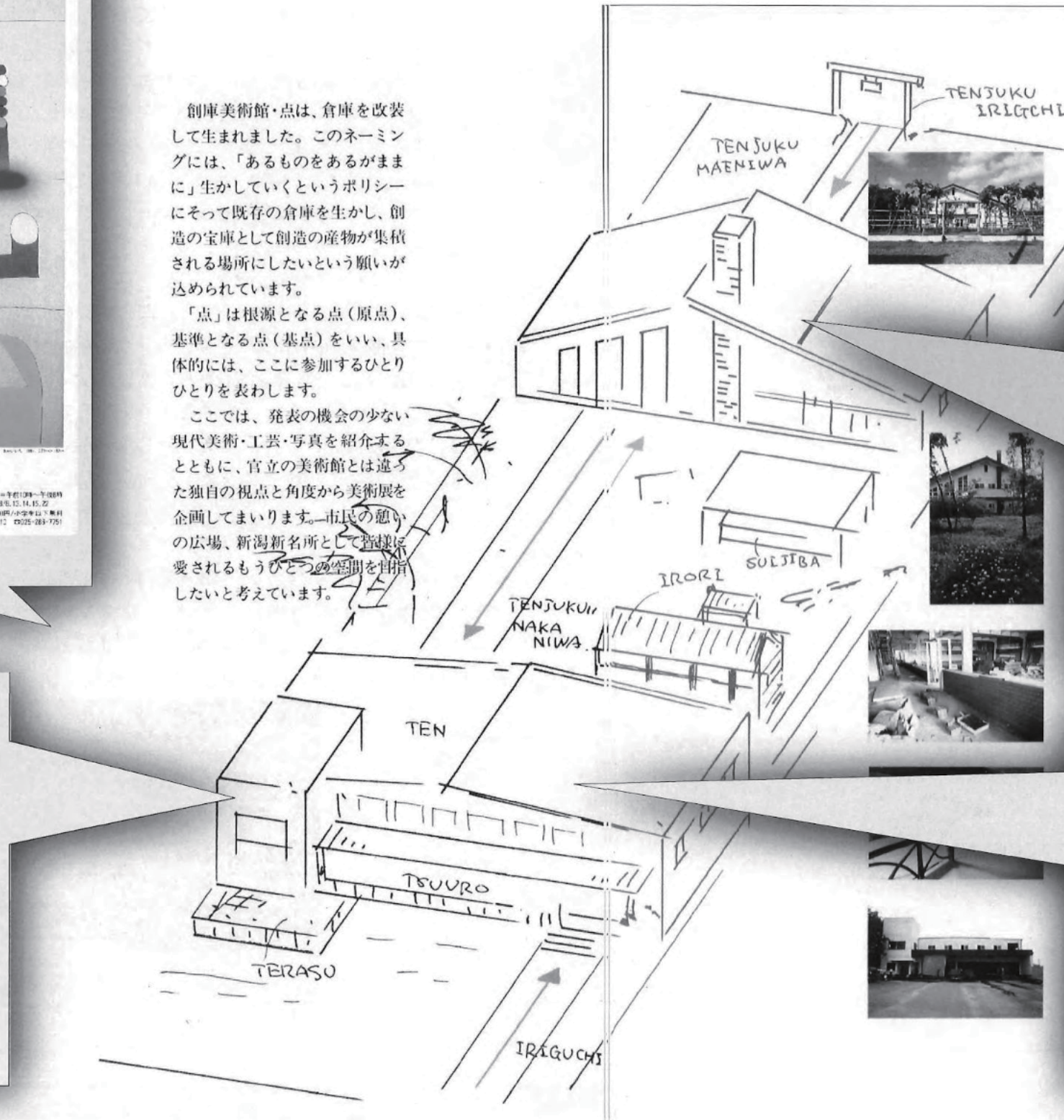
元永定正展 8月7日(日)〜8月28日(日) 創庫美術館 点
 展示時間 午前10時〜午後5時
 観覧料 大人100円/中学生以下50円
 観覧料 大人100円/中学生以下50円
 観覧時間 午前10時〜午後5時
 観覧料 大人100円/中学生以下50円
 観覧時間 午前10時〜午後5時
 観覧料 大人100円/中学生以下50円
 観覧時間 午前10時〜午後5時
 観覧料 大人100円/中学生以下50円

展示会のポスター

創庫美術館・点は、倉庫を改装して生まれました。このネーミングには、「あるものをあるがままに」生かしていくというポリシーにそって既存の倉庫を生かし、創造の宝庫として創造の産物が集積される場所にしたいという願いが込められています。

「点」は根源となる点(原点)、基準となる点(基点)をいい、具体的には、ここに参加するひとりひとりを表わします。

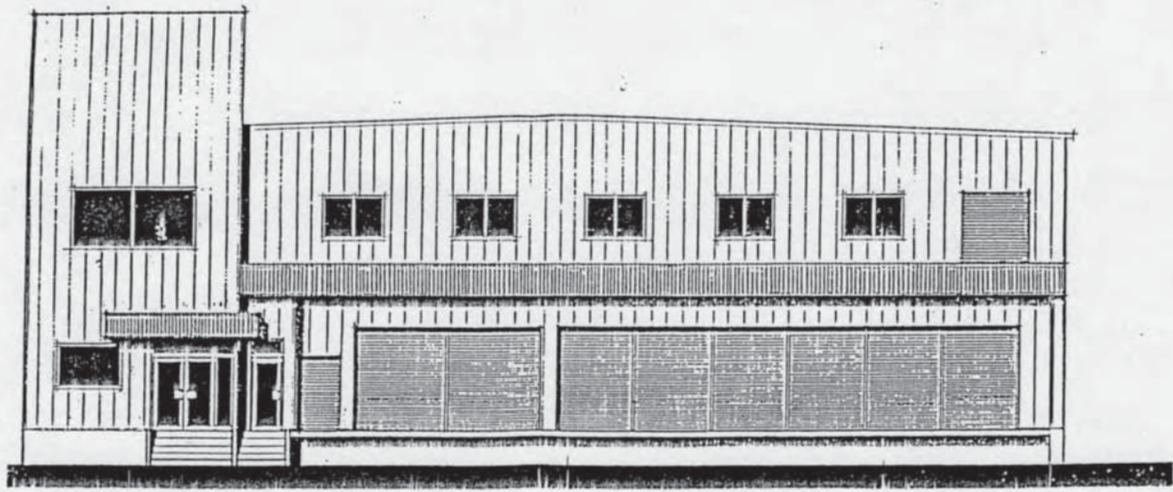
ここでは、発表の機会が少ない現代美術・工芸・写真を紹介するとともに、官立の美術館とは違う独自の視点と角度から美術展を企画してまいります。市民の憩いの広場、新潟新名所として皆様愛されるもうひとつの空間を創出したいと考えています。



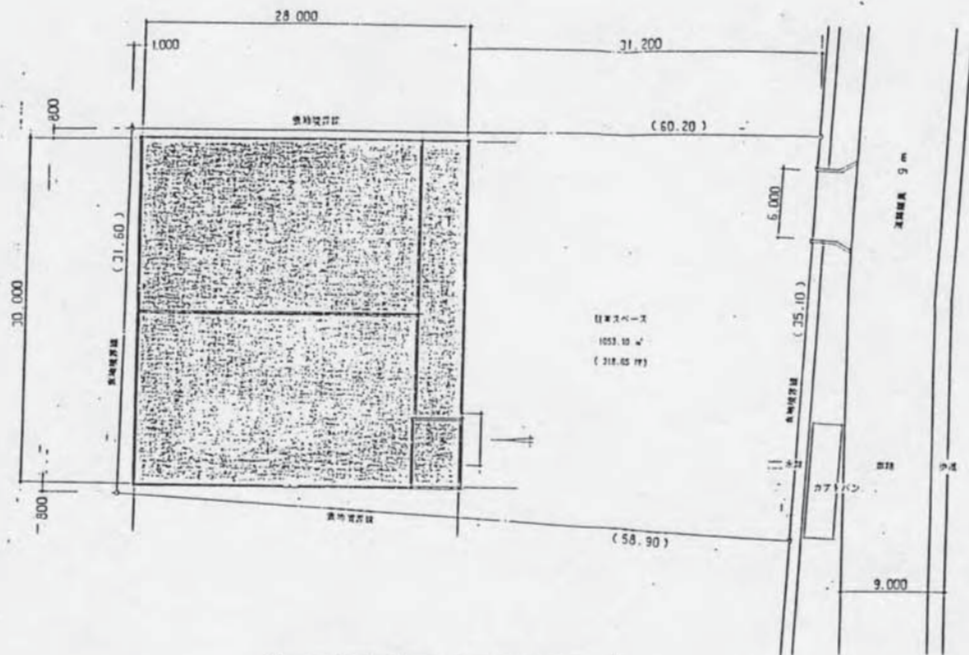
元創庫美術館 学芸員 松沢寿重 謹製 ©2009

※「元永定正+中辻悦子 絵本原画展」(2009年5月30日~7月5日/新潟市新津美術館)の開催に際し、会場配布用に作成したもの

● 図面

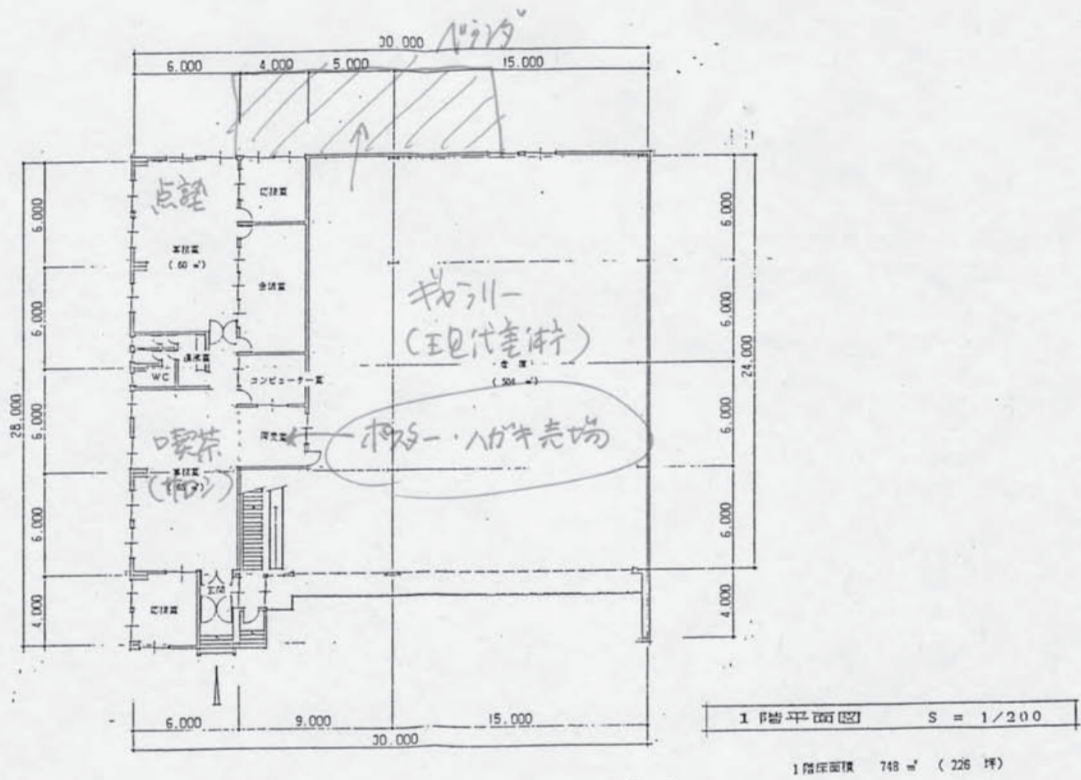
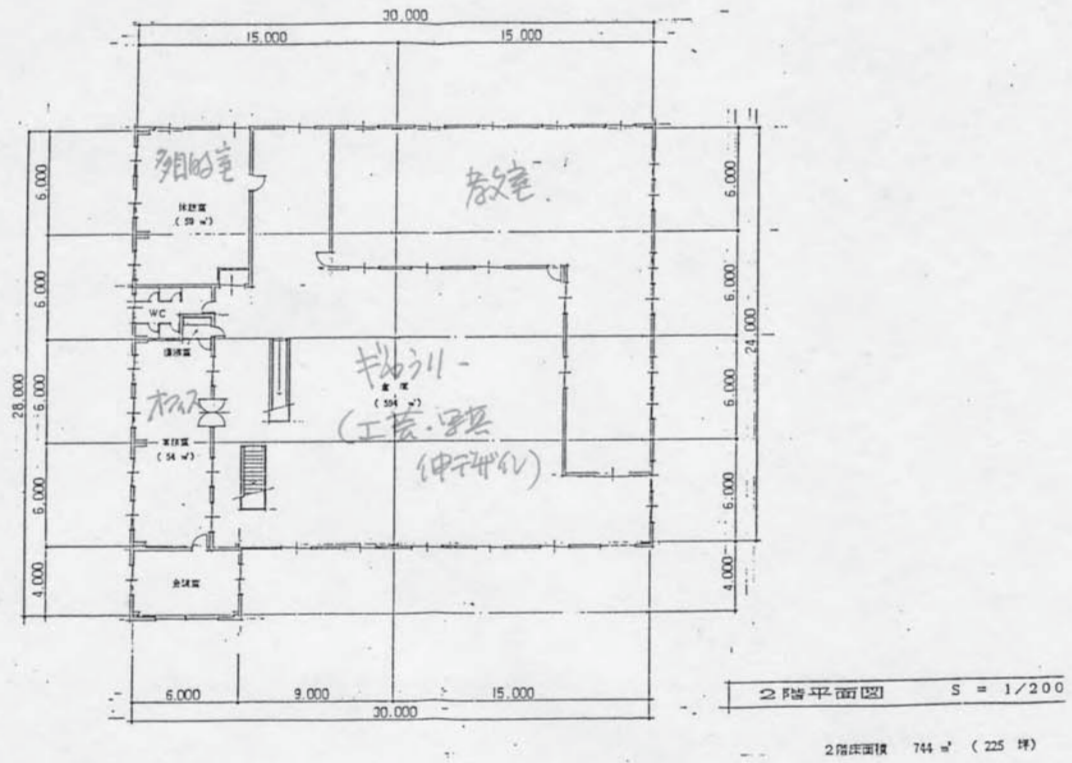


立見図 S = 1/100



敷地面積 S = 1/300

敷地面積 1981.68 m² (599.46 坪)



創庫美術館 点 関連出版物

創庫美術館 点に関わる出版物の詳細データ一覧。国立国会図書館サーチ、東京文化財研究所資料閲覧室検索、ART LIBRALIES' CONSORTIUM横断検索の検索結果に基づき、閲覧が可能な図書館等も各個に明記した(2017年2月現在)。

100人の写真家による 現代ぼおとれえと作品集

企画：藤坂泰介
発行：佐藤啓介／北日本出版
製版・印刷・製本：博進堂
発行日：1975年11月20日
仕様：136p；26.3×26.0cm 上製本、函付き
定価：7,800円
■テキスト
〈序〉渡辺義雄
〈ポートレートの思想と美学〉重森弘淹
〈ポートレート小論〉秋山庄太郎
〈ポートレート小論〉岩宮武二
〈あとがき〉藤坂泰介

国立国会図書館〔JP番号：75040769〕
東京都写真美術館図書室、東京都立多摩図書館、鹿児島県立図書館



企業ジャーナリズム メディアづくりの美学

著者：藤坂泰介
発行：清水義晴／博進堂印刷センター・うちの企画室
発行日：1982年8月1日
仕様：168p；26.5×19.2cm 上製本、カバー付き
定価：3,800円

装画：津高和一

国立国会図書館〔JP番号：82050192〕
札幌中央図書館、東京都立中央図書館、新潟県立図書館、富山県立図書館、
石川県立図書館、愛知県図書館、大阪府立中央図書館、大阪市立図書館、
山口県立山口図書館、鹿児島県立図書館



彩識事典

藤坂泰介編
発行：清水義晴／博進堂
発行日：1983年8月20日
仕様：256p；9.6×6.8cm 上製本 函付き
定価：850円

国立国会図書館〔JP番号：88007282〕



余白 津高和一・作品とエッセイ

著者：津高和一
発行：清水道雄／博進堂出版部
発行日：1987年10月1日
仕様：72p；26×21.8cm 上製本 カバー、函付き
定価：10,000円
■貼込図5枚 ■掲載図版24点
■エッセイ30篇
■(あとがき)
〈余白について〉津高和一
■年譜

第22回造本装幀コンクール 日本印刷業連合会会長賞

国立国会図書館〔JP番号：88016248〕
東京都現代美術館美術図書室

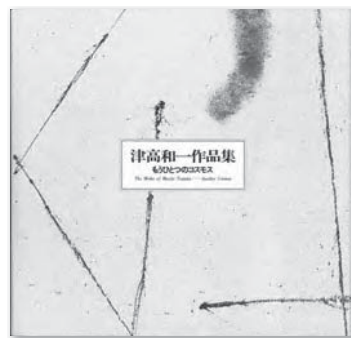


津高和一作品集：もうひとつのコスモス

著者：津高和一
 発行：清水義晴／津高和一作品集刊行会
 発行日：1987年10月1日
 仕様：204p；29.0×30.0cm 上製本 カバー、函付き
 定価：20,000円

- テキスト
 〈絵画における「詩」〉乾由明※
 〈線と面と色彩と〉木村重信※
 〈津高和一さんの世界〉三木多聞※
 〈素描・津高和一〉河原枇杷男※ ※英訳:パトリシア・マスイ
 ■作品図版144点 ■年譜 ■作品目録 ■文献

国立国会図書館〔JP番号：88020072〕
 東京国立近代美術館アートライブラリ、
 国立新美術館アートライブラリー、東京都立中央図書館



ロフト版作品集1 松宮喜代勝

著者：松宮喜代勝
 発行：清水道雄／博進堂美術出版事業部
 発行日：1988年6月1日
 仕様：72p；26.5×29.0cm 並製本 カバー付き
 定価：2,000円

- テキスト
 (巻頭文) 清水義晴※
 〈松宮喜代勝／存在と化した色彩〉たにあらた※
 ■作品図版27点 ■年譜※ ■作品目録※ ※英訳:スタン・アンダーソン

東京文化財研究所資料閲覧室、東京国立近代美術館アートライブラリ、
 国立新美術館アートライブラリー、東京都現代美術館美術図書室、
 横浜美術館美術情報センター、神奈川県立近代美術館美術図書室、
 福岡市総合図書館、若狭図書学習センター

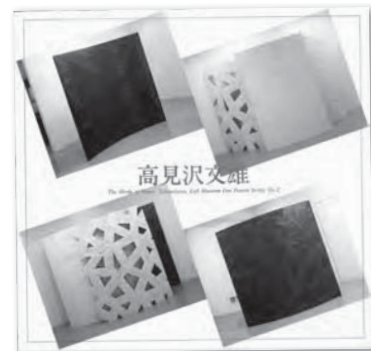


ロフト版作品集2 高見沢文雄

著者：高見沢文雄
 発行：清水道雄／博進堂美術出版事業部
 発行日：1988年7月10日
 仕様：72p；26.5×27.5cm 並製本 カバー付き
 定価：2,000円

- テキスト
 (巻頭文) 清水義晴※
 〈高見沢文雄／体を成す絵画への軌跡〉たにあらた※
 ■作品図版43点 ■年譜※ ■作品目録※ ※英訳:スタン・アンダーソン

東京文化財研究所資料閲覧室、東京国立近代美術館アートライブラリ、
 国立新美術館アートライブラリー、東京都現代美術館美術図書室、
 横浜美術館美術情報センター、神奈川県立近代美術館美術図書室、
 福岡市総合図書館



鶴巻俊郎作品集 いのちあるものたち

著者：鶴巻俊郎
 発行：清水道雄／博進堂美術出版事業部
 発行日：1988年9月23日
 仕様：24p；20.0×21.0cm 並製本
 定価：1,000円

- テキスト
 〈鶴巻俊郎展に寄せて〉清水義晴
 〈生命の鼓動〉佐藤晴夫
 〈いのちあるものたち〉鶴巻俊郎
 ■作品図版17点 ■年譜

東京文化財研究所資料閲覧室



榎倉康二作品集

著者：榎倉康二
発行：博進堂美術出版事業部
発行日：1989年3月10日
仕様：76p；29.8×21.0cm 並製本
定価：3,500円
■テキスト
〈出版にあたって〉清水義晴※
〈作品集出版にあたって〉榎倉康二※
〈榎倉康二―世界と感応する肉体〉正木基※
■作品図版75点 ■掲載作品リスト※
■年譜（編：正木基） ■文献（編：正木基） ※英訳：スタン・アンダーソンほか

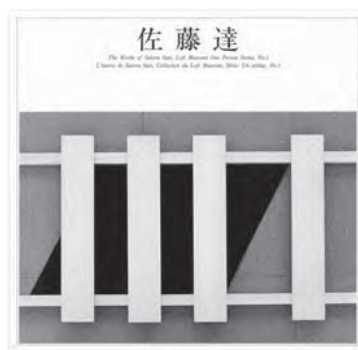
東京文化財研究所資料閲覧室、国立新美術館アートライブラリー、
金沢美術工芸大学附属図書館、東北芸術工科大学図書館、
和光大学附属梅根記念図書・情報館



ロフト版作品集3 佐藤達

著者：佐藤達
発行：清水道雄／博進堂美術出版事業部
発行日：1989年6月4日
仕様：76p；26.5×27.5cm 並製本 カバー付き
定価：3,000円
■テキスト
（巻頭文）清水義晴※
〈佐藤達／幾何形態の作品と「間。」たにあらた※
■作品図版84点
■年譜※
■作品目録※ ※英仏併記／英訳：スタン・アンダーソン

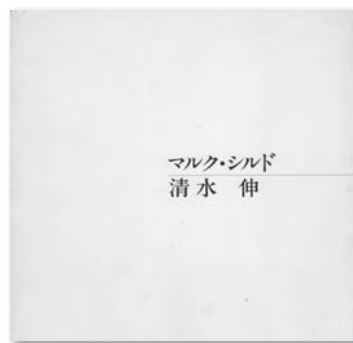
東京文化財研究所資料閲覧室、東京都現代美術館美術図書館、宮城県図書館



マルク・シルド、清水伸 作品集

著者：マルク・シルド、清水伸
発行：清水道雄／博進堂美術出版事業部
発行日：1989年8月6日
仕様：24p；20.0×21.0cm 並製本
定価：1,000円
■テキスト
〈（巻頭文）〉清水義晴
〈マルク・シルド〉宇野邦一
〈清水伸〉宇野邦一
■作品図版7点
■年譜

東京文化財研究所資料閲覧室、東京都現代美術館美術図書館



松宮喜代勝作品集

著者：松宮喜代勝
発行：清水道雄／博進堂美術出版事業部
発行日：1989年9月1日
仕様：24p；20.0×21.0cm 並製本
定価：1,500円
■テキスト
〈解き放たれる現代美術 松宮喜代勝東京縦貫展に寄せて〉清水義晴
〈彩相から彩相を持つ仮設空間へ〉松宮喜代勝
■作品図版20点
■年譜

東京文化財研究所資料閲覧室、国立新美術館アートライブラリー、
若狭図書学習センター



KOSHO ITOH

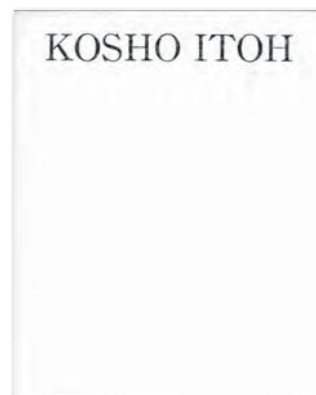
著者：伊藤公象
 発行：清水道雄／博進堂美術出版事業部
 発行日：1989年9月28日
 仕様：88p；30.0×24.0cm 並製本
 定価：5,000円

■テキスト

〈新潟海岸のピンク色の砂〉 〈ひだーあるいは土と紙の不思議な交接〉
 〈「化粧」シリーズ凍花土の美しい亀裂〉
 〈黄土（Ochre）による赤・褐色のヒロシマのための作品〉
 〈「土」に魅せられしもの…〉 たにあらた
 （対談）伊藤公象／清水義晴
 （あとがき）伊藤公象
 〈朱鷺色の浜〉 清水義晴 英訳：スタン・アンダーソンほか

■作品図版108点 ■作品目録 ■年譜

東京文化財研究所資料閲覧室、東京国立近代美術館アートライブラリ、
 国立新美術館アートライブラリー、東京都現代美術館美術図書室、横浜美術館美術情報センター、
 神奈川県立近代美術館美術図書室、東京都立中央図書館、女子美術大学相模原図書館、
 金沢美術工芸大学附属図書館、名古屋造形大学図書館、和光大学附属梅根記念図書・情報館

**関根伸夫 位相絵画Ⅱ**

著者：関根伸夫
 発行：関根伸夫／環境美術研究所、清水義晴／創庫美術館 点
 発行日：1989年10月1日
 仕様：108p；29.5×25.0cm 並製本
 定価：4,000円

■テキスト

〈位相の岸辺で〉 〈「位相絵画」について〉 関根伸夫※
 〈「位相の景」〉 林芳史※ 〈年譜／思いつくまに〉 関根伸夫※
 ■作品図版438点 ■年譜※ ※英訳：インターフェイス（山本玲子、マイク・ジャコブス）

東京文化財研究所資料閲覧室、東京都現代美術館美術図書室、東京芸術大学附属図書館、
 女子美術大学相模原図書館、和光大学附属梅根記念図書・情報館、東京都立中央図書館、
 埼玉県立久喜図書館

**川井昭夫作品集**

著者：川井昭夫
 発行：創庫美術館 点
 発行日：1989年10月1日
 仕様：24p；27.0×22.0cm 並製本
 定価：1,500円

■テキスト

〈はじめに〉 清水義晴
 〈「もの」へのある視点〉 津山昌

■作品図版14点

■年譜

国立新美術館アートライブラリー

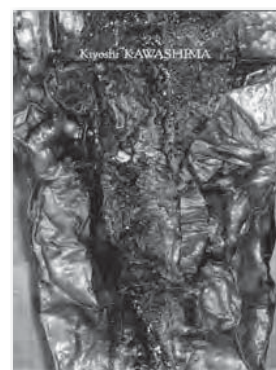
**創庫美術館 点 作品集4 川島清**

著者：川島清
 発行：清水道雄／博進堂美術出版事業部
 発行日：1989年10月6日
 仕様：88p；29.7×22.0cm 並製本 カバー付き
 定価：3,500円

■テキスト

（巻頭文）清水義晴※
 〈川島清／複合母型の視線〉 たにあらた※
 ■作品図版67点 ■作品目録※ ■年譜※ ※英訳：藤原えりみ

東京文化財研究所資料閲覧室、東京国立近代美術館アートライブラリ、
 国立新美術館アートライブラリー、東京都現代美術館美術図書室、
 神奈川県立近代美術館美術図書室、東京芸術大学附属図書館、開智国際大学図書館、
 和光大学附属梅根記念図書・情報館



川島清

著者：川島清
発行：清水道雄／博進堂美術出版事業部
発行日：1989年10月6日
仕様：24p：20.0×21.0cm 並製本
定価：1,500円
■テキスト
〈はじめに〉清水義晴
〈ねころんでから起つゾロ目の愉楽〉篠田孝敏
■作品図版14点
■年譜

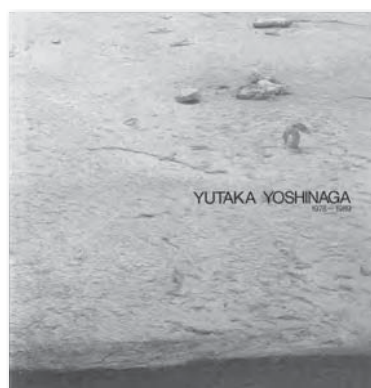
東京文化財研究所資料閲覧室、東京国立近代美術館アートライブラリ、
東京都現代美術館美術図書室、神奈川県立近代美術館美術図書室、
東京芸術大学附属図書館



吉永裕作品集

著者：吉永裕
発行：清水義晴／創庫美術館 点
発行日：1989年10月25日
仕様：60p：25.0×24.2cm 並製本 カバー付き
定価：2,800円
■テキスト
〈吉永裕の作品について〉たにあらた※
〈色彩の博物誌〉山岸信郎※
■作品図版71点
■作品目録※ ■年譜※ ■文献※ ※英訳付き

東京文化財研究所資料閲覧室、国立新美術館アートライブラリー、
東京都現代美術館美術図書室、横浜美術館美術情報センター、
神奈川県立近代美術館美術図書室、和光大学附属梅根記念図書・情報館

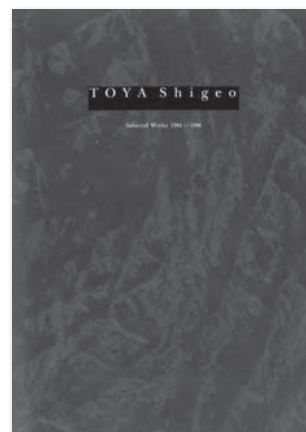


戸谷成雄

TOYA Shigeo Selected Works 1984-1990

著者：戸谷成雄
発行：博進堂／佐谷画廊
発行日：1990年3月□日
仕様：92p：29.5×21.0cm 並製本 カバー付き
定価：3,000円
■テキスト 戸谷成雄
■作品図版75点
■作品リスト
■年譜 ■文献
英訳：スタン・アンダーソン、トム・スピリアート

東京文化財研究所資料閲覧室、東京国立近代美術館アートライブラリ、
国立新美術館アートライブラリー、東京都現代美術館美術図書室、
神奈川県立近代美術館美術図書室、和光大学附属梅根記念図書・情報館、
金沢美術工芸大学附属図書館、東京都立中央図書館、
福岡市総合図書館



鈴木明作品集

著者：鈴木明
発行：鈴木明事務所
印刷：アーテックス博進堂
発行日：1991年1月30日
仕様：50p：26.0×25.0cm 並製本
定価：3,000円
■テキスト
（巻頭文）小林進
■年譜
■英訳：南平妙子

国立新美術館アートライブラリー、横浜美術館美術情報センター、東京都写真美術館図書室、
東京芸術大学附属図書館、和光大学附属梅根記念図書・情報館、福岡市総合図書館



**理念空間の創造
創庫美術館・アートプロジェクト 1988-1990**

著者：清水義晴
発行：清水道雄／博進堂
発行日：1991年5月1日
仕様：p.84；19.0×18.5cm
定価：1,000円
■対談〈理念空間の創造〉清水義晴・鈴木明

新潟市立中央図書館、新潟市立山の下図書館、大阪市立中央図書館



元永定正作品集 1946-1990

著者：元永定正
発行：清水道雄／博進堂
発行日：1991年7月13日
仕様：228p；29.0×30.0cm 上製本 カバー、函付き
定価：25,000円

■テキスト
〈ぐたいのころ〉元永定正
〈元永定正さんのこと—25人が語る元永定正論〉
泉茂／小倉忠夫／金関寿夫／岸宏子／木村重信／クルック麗子／榊莫山／白髪一雄／
須田剋太／瀬木慎一／谷川俊太郎／津高和一／勅使河原宏／東野芳明／富山秀男／
濱邊萬吉／早川良雄／針生一郎／藤田八栄子／三木多聞／村上三郎／村田慶之輔／
森口宏一／横尾忠則／吉原英雄
■作品図版280点
■年譜 ■作品目録 ■パブリックコレクション

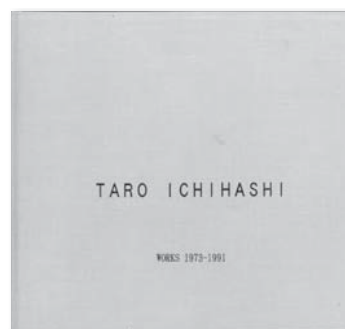
東京文化財研究所資料閲覧室、東京都立中央図書館、大手前大学・大手前短期大学図書館、
京都工芸繊維大学附属図書館、京都精華大学情報館、神戸松蔭女子学院大学図書館、
国際日本文化研究センター、名古屋造形大学図書館、和光大学附属梅根記念図書・情報館



TARO ICHIHASHI WORKS 1973-1991

著者：市橋太郎
発行：アーテックス博進堂
発行日：1992年12月24日
仕様：72p；24.2×26.2cm 上製本
定価：不明
■テキスト
〈市橋太郎の作品 夢のバトンタッチ〉千葉成夫
■図版104点

東京文化財研究所資料閲覧室



風の間の仲間

著者：大久保英治
発行：相場隆夫／アーテックス博進堂
発行日：1993年5月25日
仕様：152p；21.0×14.8cm 並製本 カバー付き
定価：1,000円

東京文化財研究所資料閲覧室、東京国立近代美術館アートライブラリ



創庫美術館 点で行われた催し

※美術館主催事業のほか、貸館等による催事も含む

1987年	11月3日～11月30日 12月3日～12月28日	津高和一展 アートポスター展
1988年	1月15日～2月14日 2月28日～3月27日 4月5日～4月24日 4月29日～5月22日 5月28日～5月29日 6月1日～6月12日 6月15日 6月19日～7月3日 7月7日～7月8日 7月10日～7月31日 8月2日～8月3日 8月7日～8月28日 9月1日～9月4日 9月10日 9月11日～18日 9月23日～10月10日 10月12日～10月13日 10月16日～10月30日 11月3日～11月27日 11月5日 11月4日～11月6日 12月3日～12月25日 12月3日 12月4日～12月25日 12月4日 12月4日 12月18日	新潟現代美術点展 現代工芸点展 市橋太郎展 アートバザール いずみや機材展 第一回学校写真公募展 金沢舞踏館公演 松宮喜代勝展 まどか商品見本市 高見沢文雄展 親子映画会「宝島」「ガンバの大冒険」 元永定正展 アパルトヘイト否！国際美術展 森山威男トリオジャズコンサート 現代美術ちいさな流れ展 鶴巻俊郎展 IDP 会社案内展 たくらが館展 ミラノ家具展 ルシア塩満トリオコンサート 劇団カタコンベ公演 アートポスター&カレンダー展 夢月亭歌麿独演会 青木弘樹展 (2F ギャラリー) 山浦健夫講演会 朗読詩祭 '88 DRAMING ARC
1989年	1月15日～2月12日 2月26日～3月19日 3月10日～3月11日 4月2日～4月16日 4月22日～5月26日 5月28日 5月29日 6月4日～6月25日 7月9日～7月30日 8月6日～8月27日 8月30日～8月31日 9月3日～9月24日 10月1日～10月22日 11月3日～12月17日	第二回新潟現代美術点展 ポストクラフト展 新潟大学演劇部卒業公演 堀川紀夫展 えきなんをを考える 大木ヒカルギター発表会 高橋長英詩朗読会 佐藤達展 川島清展 マルク・シルド 清水伸 二人展 親子映画会「風の谷のナウシカ」 吉永裕展 川井昭夫展 伊藤公象展
1990年	1月14日～2月18日 2月10日～2月11日 3月4日～4月15日 4月29日～6月17日 6月24日 6月27日～7月10日 7月15日～7月31日 8月12日～9月9日 8月12日～9月9日 9月23日～10月21日 11月3日～12月16日	第三回新潟現代美術点展 ビデオ形態学講座 関根伸夫展 戸谷成雄展 ガレージセール E氏ポスターコレクション展 創庫・現代美術コレクション展 青木弘樹展 長谷川和也ガラス展 (ミニギャラリー) 信田俊郎展 レア・アート・エクスプレス
1991年	1月13日～3月31日 4月7日 4月10日～4月24日 4月28日～5月12日	第四回新潟現代美術点展 PART1: インスタレーション 1月13日～1月31日 PART2: 絵画 2月3日～2月28日 PART3: 彫刻 3月3日～3月31日 ハンブルク・リコーダーアンサンブル演奏会 小林仁イラスト展 岡田茉莉子映画ポスター展



津高和一展 記念講演会 (点整にて)



アパルトヘイト否！国際美術展

後日譚となるが、清水義晴が新潟県の地域振興策「ニューにいがた里創プラン」の県庁担当者、北川フラムを紹介するのは、この展覧会からの縁であった。2000年の「大地の芸術祭」へつながる端緒の一つとして特記する。



伊藤公象展



戸谷成雄展

5月11日 青柳克巳パフォーマンス
 5月19日～6月11日 名嘉睦念手彩色木版画展
 6月16日～7月21日 市橋太郎展
 8月4日～8月31日 榎倉康二展
 9月8日～9月22日 霜鳥健二展
 9月29日～10月10日 信田俊郎展
 10月13日～10月27日 関根哲男展
 11月3日～12月14日 レア・アート・エクスプレス Vol.2



榎倉康二展

1992年 1月12日～2月23日 創庫美術館・コレクション展
 3月8日～3月27日 第五回新潟現代美術点展（前期）
 4月1日～4月24日 // （後期）
 5月3日～5月30日 木嶋彰展
 6月7日～6月27日 大嶋彰展
 会期詳細不明 印刷美術展
 7月19日～8月8日 フォッサマグナ展
 8月19日～8月30日 アンティエ・エ・グメルス展
 9月20日～10月25日 大久保英治展
 11月3日～12月12日 レア・アート・エクスプレス Vol.3



大久保英治展

1993年 1月23日～2月21日 三村逸子展
 会期詳細不明 創庫美術館・コレクション展
 3月28日～4月24日 第六回新潟現代美術点展
 5月2日～5月29日 滝沢洋三郎展
 6月6日～6月20日 松沢寿重展
 6月26日～7月25日 鈴木明展
 8月1日～8月28日 杉木浩一展
 9月5日～9月25日 小柳幹夫展
 10月3日～10月23日 左官職人作品展
 11月7日～12月4日 レア・アート・エクスプレス展 Vol.4



信田俊郎展

1994年 会期詳細不明 創庫美術館・コレクション展
 3月27日～4月24日 星野健司展
 4月29日～5月27日 清水伸展
 5月29日～6月26日 マルク・シルド展
 7月3日～7月31日 福田新之助展
 8月7日～8月28日 アンティエ・エ・グメルス展
 9月4日～9月25日 吉永裕展
 10月2日～10月29日 大竹英志展
 11月3日～11月26日 信田俊郎展

◆サバンク・テンポラリー・ミュージアム

東京都杉並区永福町にて世田谷信用金庫の支店旧店舗を転用した時限アートスペース

1989年 3月10日～5月31日 榎倉康二展
 8月30日～9月28日 松宮喜代勝展
 10月6日～11月12日 川島清展

◆「感境創造」プロジェクト

公共のスペースや企業のオフィス空間などに現代美術の作品を設置

1988年 10月 新潟市・古町通5番町「古町5プロジェクト」 磯部聡《MOTION'88》※現存せず
 12月 五泉市・株式会社関川 松宮喜代勝《はしご》《50 + 50 = 100》《いろはにほへと》※現存せず

1989年 3月 新潟市・株式会社博進堂「ART FACTORY」 松宮喜代勝《銀河鉄道》《A列車》
 3月 新潟市中央区西大畑公園 星野健司《不思議の森》
 4月 新潟市立旧二葉中学校40周年記念モニュメント 青木弘樹《STONE HORN》
 7月 新潟市・富士総業株式会社本社ビル2F 松宮喜代勝《仮設空間》
 8月 新宿区・株式会社木原商店アक्सビル 松宮喜代勝 ※現存せず
 8月 新潟市・青山海岸「朱鷺色の浜プロジェクト」 伊藤公象《霧困気・化粧》※現存せず

1990年 3月 上田市・ヤジマビル1F「愛 YAJIMA」入口モニュメント 関根伸夫《絢の泉》

1993年 3月 村上市・神林総合運動公園（パルパーク） 鈴木明《COSMOS FIELD KAMIHAYASHI》
 3月 新潟市立月潟中学校食堂棟壁面レリーフ 霜鳥健二《自然と人》

参考文献

■博進堂の社歴に関連する文献

PR誌『企業じゃあなりずむ』創刊号～50号、博進堂、1981～89年（※創刊号～3号の誌名は『こみゆにけえしょん』）
会社案内『まいぼおとれえと』博進堂、1985年
会社案内『MY CATALOG 1986』博進堂、1986年
会社案内『新しい感覚 美しい作品』博進堂、1988年
会社案内『number1 ▶ only1』博進堂、1989年
『PMT-NOW 19 特集：印刷会社の文化活動』ハイデルベルグPMT、1990年
会社案内『ONLY ONE COSMOS』博進堂、1992年
『株式会社博進堂の歴史と創業理念』博進堂、1992年
創業80周年記念『軌跡 博進堂から生まれたもの』（四つ折りA4判リーフレット）2001年
『博進堂 企業文化ノオト』博進堂、2008年
新聞連載「にいがた老舗物語〈思い出を形に・博進堂〉1～4」新潟日報、2015年2月15日～3月1日

■藤坂泰介に関連する文献

『二科美術展（37、38、43、44、45回）陳列目録』二科会、1952～1960年
藤坂泰介著『あるばむ・れいあうと』大阪コロタイプ印刷、1968年
藤坂泰介著『学校あるばむ編集ノオト』博進堂、1975年
藤坂泰介監修『全国学校アルバム秀作写真集』北日本出版、1975年
藤坂泰介企画『100人の写真家によるぼおとれえと作品集』北日本出版、1975年
藤坂泰介著『あるばむづくり・すたいるぶっく』博進堂、1980年
藤坂泰介著『企業ジャーナリズム—メディアづくりの美学』博進堂、1982年
藤坂泰介著『点塾文庫『指導者の条件 グループリーダー論』『野外生活法 システムキャンプ』『あそび グループゲーム集』『うた グループソング集』
『あんそろじい 朗読詞華集』5冊組』博進堂、1986年
『藤坂泰介先生事蹟 新しい点をつくらう』博進堂、1993年
清水義晴著『変革は、弱いところ、小さいところ、遠いところから』太郎次郎社、2003年
清水義晴著『博進堂の師 藤坂泰介先生』博進堂、2015年
清水義晴著『博進堂の師 藤坂泰介先生』第二集 博進堂、2016年

■東郷青児に関する文献

『二科70年史』二科会、1985年
『東郷青児 蒼の詩 永遠の乙女たち』河出書房新社、2009年
『収蔵品目録 東郷青児作品』東郷青児記念 損保ジャパン日本興亜美術館、2016年

■津高和一に関する文献

津高和一著『美の生理—造形言語と内蔵言語と—』亜騎保、1965年
『山村コレクションによる 津高和一 作品の流れ』山村徳太郎、1971年
津高和一著『余白 津高和一・作品とエッセイ』博進堂、1987年
津高和一著『津高和一作品集：もうひとつのコスモス』清水義晴／津高和一作品集刊行会、1987年
『戦後美術の断面—兵庫県立近代美術館所蔵・山村コレクションから』図録 千葉市美術館、1996年
津高和一著『僕の呪文と抽象絵画』神戸新聞総合出版センター、2005年
『生誕百年 津高和一 架空通信展』図録 西宮市大谷記念美術館、2011年

■その他の参考文献

日経産業新聞編『ウォーターフロント開発—都市再生に挑む先進プロジェクト』清文社、1987年
『and alpha』臨時増刊号 特集「24時間万代島フォーラム」博進堂、1988年
『天寿園』（開館記念パンフレット）天寿園、1988年
博報堂生活総合研究所編『オイコット・ライファー「非東京的」生活の魅力』にっかん書房、1989年
小林進編著『オルターナティブ スペース論 場の問題』ダンスワーク舎、1989年
『天寿園の歩み Vol.1』天寿園、1990年
『ニイガタ美術通信インコントロ』創刊号～38号 ニイガタ美術通信、1990～1993年
小林進著『文化を支える アートマネジメント《人材・財政・企画》』朝日出版社、1994年
『環日本海圏：21世紀への文化戦略』新潟日報事業社、1994年
『文化のかおるまちづくり 新潟市文化振興ビジョン』新潟市総務局国際文化部文化振興課、1995年

荒井直美「美術館・博物館の動き 1990-2004」『新潟県美術名鑑』新潟日報社、2005年
 実川暢宏・寺田侑共著『現代美術 夢 むだ話』冬青社、2010年
 金子隆一「講演：コロタイプ150年の歩み」『玻璃彩 No.10』コロタイプ技術の保存と印刷文化を考える会、2011年
 『Niigata Interview Magazine LIFE-mag. Vol.007【新潟・市民映画館シネ・ウインド編】』エイチ・ケイ コネクション、2013年

■〈創庫美術館 点〉に関する新聞、雑誌等の記事掲載

1987年

「新潟市内に現代美術館」日本経済新聞・新潟7月31日
 「新潟にモダンアートの館」サンケイ新聞・新潟8月22日
 「現代美術創庫いっぱい」新潟日報10月13日夕刊
 「倉庫転じて美術館」毎日新聞・新潟11月3日
 「創庫美術館『点』オープン」日刊スポーツ11月4日
 「新潟に『倉庫美術館』地方の文化発信基地に」日本経済新聞11月4日
 「文化の拠点オープン」朝日新聞・新潟11月5日
 「遊び心もたっぷり」と朝日新聞・新潟11月17日

1988年

「ロフト感覚のギャラリーで 県内有志23人が創作実験」新潟日報1月14日夕刊
 「現代感覚いっぱい 創庫美術館 点」読売新聞・新潟1月23日
 「自由な発想の『現代美術展』」朝日新聞1月24日
 藤由暁男「ロフト空間の誕生」新潟日報1月28日
 「不思議な単色の深み」新潟日報1月30日
 「新潟に現代美術のギャラリーオープン」月刊ギャラリー1月号
 「創庫美術館・点」美術手帖2月号
 「持ち寄り力作、労作、傑作」新潟日報3月30日夕刊
 「新進美術作家をプロモート」日本経済新聞・新潟4月5日
 「ミュージック・オンシステムを実施」週刊朝日だより4月第1週号
 「新穂村出身の市橋さんが個展」毎日新聞・新潟4月9日
 「私の新たな挑戦」と意欲燃やす」毎日新聞・新潟4月13日
 「圧倒する抽象画 市橋太郎展」新潟日報4月19日夕刊
 「第一線の作家が出品〈アパルトヘイト否 国際美術展が全国行脚〉」新潟日報6月4日
 北川フラム「現代美術500日間の冒険」新潟日報7月7日
 「人種差別反対の美術展」朝日新聞・新潟7月10日
 「万代島、24時間フォーラム」新潟日報8月2日
 「展覧会：元永定正展」新潟日報8月6日夕刊
 「こちら街づくり討論」新潟日報8月7日
 「24時間万代島フォーラム」新潟日報8月11日夕刊
 清水義晴「私の視点：現代美術は体で感じるアート」新潟日報8月13日
 「24時間万代島フォーラム」週刊朝日だより8月第5週号
 「コレクターズクラブが誕生 現代美術を身近に」新美術新聞9月1日
 清水義晴「アパルトヘイト否！ 国際美術展国境を超えた現代美術の力」新潟日報9月24日
 「商店街に『虹の橋』杉材500本を組み合わせ」朝日新聞・新潟10月18日
 「古町に虹の懸け橋」新潟日報10月18日夕刊
 「県内アート：鶴巻俊郎展」新潟日報10月22日
 「虹のアーチ。古町に彩り」新潟日報10月24日
 「客びっくり杉アーチ」朝日新聞・新潟10月24日
 「私のフリースペース：点主閣 館長室に畳とこたつ」新潟日報10月25日
 「『芸術で街はよみがえるか』ETV8で全国放映」新潟日報10月31日夕刊
 中村英樹「『古町五番町』まるごと現代美術」新潟日報11月8日
 「新潟の〈創庫美術館・点〉一周年記念し開放」朝日新聞・新潟11月5日

1989年

「現代美術の県人21人展」新潟日報1月11日夕刊
 「画面に不思議な暖かさ 誠実な二村裕子の版画」新潟日報1月28日夕刊
 「県内アート：個性的で意欲的 新潟現代美術点展」新潟日報2月1日
 「サバンク・テンポラリー・ミュージアム（仮想美術館）開設」月刊ギャラリー3月号
 「新しい現代美術の空間サバンク・テンポラリー・ミュージアム」月刊美術3月号

「文化往来：空きスペース使い `時限、美術館」日本経済新聞 3月1日
高島直之「榎倉康二展」モノマガジン No.133 (3-16)
「仮想美術館は壁 榎倉康二さん」朝日新聞 3月25日
「Walls that liberate Enokura's installations portray positive side of human intervention」THE JAPAN TIMES WEEKLY : March 25
「虚構はざとる新空間 榎倉康二 壁と廃油のフォルム」読売新聞 3月29日
「新しいアートスペースの試み サバノク・テンポラリー・ミュージアム」アート・トップ No.110 (4-5月)
「仮想美術館の試み」三彩 4月号
米倉守「眼の刻印：巨大な壁で日常空間を揺さぶる」朝日新聞 4月6日夕刊
「現代美術による新空間への移行」流行通信 Homme5月号
「銀行を侵蝕した現代美術 サバノク・テンポラリー・ミュージアム」新美術新聞 5月1日
「未来へ開け『石の角』二葉中にモニュメント」新潟日報 5月26日
「在仏 20年記念し新潟で個展一造形作家の佐藤達氏」新潟日報 6月20日
「企業理念をインスタレーションで表現」日経トレンディ 8月号
「砂浜彩る焼き砂造形 伊藤公象氏が創作」新潟日報 8月10日
「ピンクの砂 きょう小針浜海岸に `美、が浮かび上がる」スポーツニッポン 8月11日
「パリ在住の画家・清水伸さん フランスの友人と2人展」新潟日報 8月23日
「人らんだむ：清水義晴さん」新美術新聞 9月11日
片岸昭二「刻々変化する外光の中で 自然の在り方を探る 川井昭夫展」北日本新聞 10月17日
「反人種差別パワフルに 南アの黒人音楽劇」新潟日報 10月30日
「さあ、立ち上がれ！目をそらすな。この現実を見るんだ！南アフリカ黒人劇『アシナマリ』」月刊ウンド 49号
「『空間を化粧』展覧会一伊藤公象展」朝日新聞 11月9日
「伊藤公象展 ほろよいのエロス」新美術新聞 12月1日
「壮大な規模に驚嘆一伊藤公象展」新潟日報 12月6日

1990年

「非東京で独自文化を 新潟オイコット推進委が発足」新潟日報 1月25日
「独自の文化育て街に魅力を オイコット：小川弘幸さん」新潟日報 3月3日
「新潟オイコット推進委発足 まず環境美術テーマに展覧会とシンポ開催」朝日新聞・新潟 3月4日
藤由暁男「関根伸夫展から生まれるもの」新潟日報 3月13日
「現代彫刻の場所 位置意識し時代見る 戸谷成雄さん」新潟日報 4月25日
「にいがたを考える シンポジウム都市復興の構図」財界にいがた 5月号
中村英樹「深部と細部への意志 戸谷成雄の彫刻」新潟日報 5月23日
「これぞ `黄金時代の証明、創庫美術館で邦画ポスター展」新潟日報 7月10日
「モダンバレエの `躍動、を画布に 創庫美術館で青木弘樹作品展」新潟日報 8月15日
「青木弘樹展 あふれ出るエネルギー」毎日新聞・新潟 8月17日
「創庫美術館と美術出版を合体させた博進堂の狙い」財界にいがた 9月号
「博進堂 美術印刷で新会社 美術館併合し受注」日本経済新聞・新潟 9月4日
「連載：新しいアートの拠点 牛淵ミュージアム 1~4」愛媛新聞 9月12~15日（※創庫美術館 点を取材）
「SHIMAを描く一信田俊郎展」新潟日報 10月2日
「県内若手 17人のレア・アート展」新潟日報 10月31日
「若手の作品集め美術展」新潟日報 11月2日
「現代的作品 33点 創庫美術館 3周年記念展」産経新聞・新潟 11月24日
「倉庫美術館が3周年」朝日新聞・新潟 11月26日

1991年

「芸術の心、地方から 現代新潟美術点展始まる」産経新聞・新潟 1月14日
「20人の作品、3会期で一新潟現代美術点展」毎日新聞・新潟 1月15日
「雰囲気はポップ 創庫美術館で現代美術点展」新潟日報 1月23日
「陶芸に挑戦 新潟市長潟の創庫美術館で体験教室」スポーツニッポン 4月14日
松沢寿重「私の視点：時代を共有する観衆よ育て」新潟日報 5月15日
中林二郎「私の好きなワンフレーズ」新潟日報 5月25日
「新潟エリア旬情報：倉庫のなかの現代美術、創庫の好奇心」トランヴェール 6月号
「明るさの中に沖縄の重さ 名嘉睦穂木版画展」新潟日報 6月4日
「佐渡にも仕事場を 現代美術作家・市橋太郎さん」新潟日報 6月21日
「見るだけで楽しい現代美術作品展」産経新聞・新潟 11月5日
「EYE-POPPER /レア・アート・エクスプレス」BT 美術手帖 12月号
「平成3年今年の顔：賀谷徹さん 砂芸術で人々を魅了」産経新聞・新潟 12月20日

1992年

「ストライプの魅力 上越出身の画家 木島彰氏が個展」産経新聞・新潟 5月5日
 「県人アート：風土表す沈静の色 木島彰初の個展」新潟日報 5月7日
 「墨絵で表すヨーロッパの心―アンティエ・エ・グメルス展」朝日新聞 8月21日
 「県人アート：墨絵に人間デッサン―アンティエ・エ・グメルス展」新潟日報 8月27日

1993年

松沢寿重「創造の宝庫目指すロフト・ミュージアム 創庫美術館」21世紀版画 2月号
 「コンピューター芸術―滝沢洋三郎展」朝日新聞・新潟 5月19日
 「体感彫刻、楽しんで 鈴木明さんの個展」新潟日報 6月24日
 「環境・芸術マッチさせて 長潟の創庫美術館・彫刻家らシンポ」新潟日報 6月29日
 「全国の左官職人が作品展」新潟日報 10月18日

1994年

藤由暁男「あーとぴっくす：独自の顔料、静かな世界漂う 清水伸展」新潟日報 5月17日
 「パリ在住画家が個展―清水伸展」朝日新聞 5月25日
 上原誠一郎「あーとぴっくす：全く自由な形で花開く アンティエ・エ・グメルス展」新潟日報 8月6日
 「投書欄：倉庫美術館の閉館を惜しむ」新潟日報 12月19日夕刊

■〈創庫美術館 点〉発行の印刷物（無料配布のパンフレット、リーフレット等）

1988年1月「新潟現代美術点展」A4判 8p パンフレット〔テキスト：清水義晴、林紀一郎〕
 1988年2月「現代工芸点展」A4判 12p パンフレット〔テキスト：清水義晴、勅使河原宏〕
 1988年4月「市橋太郎展」A4判 8p パンフレット〔テキスト：清水義晴〕
 1988年6月「彩相 松宮喜代勝展」A4判 4p リーフレット〔テキスト：清水義晴、松宮喜代勝、たにあらた〕
 1988年7月「記憶の衝立 高見沢文雄展」A4判 4p リーフレット〔テキスト：清水義晴、高見沢文雄、たにあらた〕
 1988年8月「元永定正展」A4判 4p リーフレット〔テキスト：清水義晴、元永定正〕
 1988年9月「鶴巻俊郎展 [いのちあるものたち]」A4判 4p リーフレット〔テキスト：清水義晴、鶴巻俊郎〕
 1988年11月「創庫美術館 点 '87～'88年度活動録」A4判 4p リーフレット
 1989年1月「そして、いま 第2回新潟現代美術点展」A4判 12p パンフレット〔テキスト：清水義晴、林紀一郎〕
 1989年2月「ポストクラフト展」A4判 12p パンフレット〔テキスト：清水義晴、兼古敏男〕
 1989年8月「マルク・シルド 清水伸 二人展」A4判 4p リーフレット〔テキスト：清水義晴、宇野邦一〕
 1989年10月「川井昭夫展 草上の幾何学」A4 三折りリーフレット
 1990年1月『con 点 porary NEWS'90』No.1 A4 三折りリーフレット〔テキスト：清水義晴〕
 1990年3月『con 点 porary NEWS'90』No.2 A4 三折りリーフレット〔テキスト：清水義晴〕
 1990年1月「関根伸夫展」A4判 4p リーフレット〔テキスト：関根伸夫、藤由暁男〕
 1990年4月「戸谷成雄展」A5判 4p リーフレット
 1990年5月『con 点 porary NEWS'90』No.3 A4 三折りリーフレット〔テキスト：清水義晴〕
 1990年7月『CONTEMPORARY NEWS』No.4 A4 三折りリーフレット〔テキスト：清水義晴〕
 1990年9月「信田俊郎展」A5変判 4p リーフレット〔テキスト：中林二郎〕
 1990年12月「レア・アート・エクスプレス」B5判 8p パンフレット〔テキスト：中林二郎〕
 1991年6月「市橋太郎展」B5横判 8p パンフレット
 1991年9月「AUTUMN SELECTION '91」A4判 4p リーフレット〔テキスト：霜鳥健二、信田俊郎、関根哲男〕
 1992年3月「第5回新潟現代美術点展」B5判 28p パンフレット〔テキスト：たにあらた〕
 1992年5月「木島彰展」A4判 8p パンフレット〔テキスト：たにあらた〕
 1992年5月「大嶋彰展」A4判 8p パンフレット〔テキスト：たにあらた〕
 1993年6月「松沢寿重展」B5判 8p パンフレット〔テキスト：中林二郎〕
 1993年6月「環境と対話する 体感彫刻家―鈴木明」B5判 12p パンフレット〔テキスト：鈴木明〕
 1994年3月「星野健司―彫刻展―」B5判 12p パンフレット〔テキスト：佐藤晴夫〕
 1994年5月「マルク・シルド展」B5横判 8p パンフレット〔テキスト：マルク・シルド〕
 1994年10月「大竹英志―内なる自然を求めて―」B5判 8p パンフレット〔テキスト：中林二郎、大竹英志〕

新潟市美術館・新潟市新津美術館研究紀要 第5号 (平成28年度)

Bulletin of Niigata City Art Museum & Niitsu Art Museum No.5

発行日 / 2017年3月24日

編集・発行 / 新潟市美術館

〒951-8556 新潟市中央区西大畑町5191-9

TEL:025-223-1622

FAX:025-228-3051

印刷 / 株式会社 博進堂

ISSN 2187-6770



Niigata City Art Museum
